

---

# 僕の彼女は極道さん。

伊藤勇作

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の彼女は極道さん

### 【Zコード】

N7548C

### 【作者名】

伊藤勇作

### 【あらすじ】

僕の名は月見優貴、高校2年生だ。平凡な日々を送っていたはずなのに・・・いつの間にか色々な人が集まっちゃって・・・え？僕の彼女？いつの間に！？しかもその子って極道さんの娘！？これじゃあ、僕の身が持たない！！

## プロローグ（前書き）

どうも。はじめましての方、お久しぶりの方。

毎度？お馴染みの伊藤です。

初めから訂正をして結構な時間がかかりました。

長かった…そして変わったな…と言えない。

確かに変わったといえる部分があるけど、殆どがわかつていなってどういうことだ…

と思いながらも、一応出来たのではそれはそれでよしとこよひ（皿口）

完結

また更新できるし、この作品を楽しんでいただければそれでいいと思える自分がいる。

なんというか単純だ…

ではまた長い付き合いになるかと思こますけど、これからもよろしくお願いします。

## プロローグ

時代・中世歐州

＊＊＊＊

少年は周りを見渡す。

そこは荒れ果てた荒野。

崩れ果てた建物のなり果て…すべてが荒野の灰となつていて。

理想の果てに求めた世界。

世界が人と獸の血で真っ赤な色に染め上げられ…

沢山の肉塊は生き物の為り果て…

人々の血に獸の血。

それらを斬り裂いた剣は血で汚れ、着ている服や壊れかけの甲冑は鮮血で紅く染め上げ、周囲は屍の臭いで充満している。

「……終わった、な」

周りを見渡すかぎり立っているのは自分のみ。

もともと味方など存在はしない。  
そつ…存在するはずがない。

何故なら僕が国を裏切ったからだ。

王を阻む敵はすべて斬り、民を守るために剣を振る。

それが騎士だ。

…だが僕は違う。

国を捨て、民を捨て、全てを投げ捨て、彼女だけを守るために剣を振る。

騎士は戦うためにいる。

それ以外の価値はないし、僕はそのすべしか知らない。

呪いだろうが運命だろうがそんなこと知ったこっちゃない。

守る為に騎士がいるのだ。

なら、僕は彼女を守るために剣を振る。

それが僕が選んだ道。

たとえ最後になろうとも戦い抜いてみせる。

それが僕の意思だから… その結果がどんな悲惨な未来になろうとも… だ。

「……まだ来るか」

前を見ればいやでもわかる沢山の軍勢。

「五千…六千…いや、九千はいるな」

先ほどの戦いで魔力を消費し全ての力を使い果たした今、この軍勢を止めるすべはない。

…王よ…僕と彼女を抹殺するだけなのにこんなに送り込むことはなからうに…

「そもそも放つておけばよいものを…」

そんなに彼女が憎いのか…いや、裏切った僕が憎いのかもしない。

「だが…こちらも負けられない」

そう負けではならない。

負けたら彼女の身が危ない。

…けど、今の僕では勝てる余力もない。

「…なら簡単な話だ」

負けるくらいなら数多くの敵を道連れにする。  
…いや、全ての敵を道連れにしてみせる。

「それが唯一僕に出来ることだ

残りの魔力を剣に集中させる…イメージは刃、全ての敵を切り裂く刃。

「さあ…これで終わりにしよう。僕もお前たちも…」

剣を振りかぶり、敵の陣へと歩を進める。

「でも…贅沢をいうなら

…また彼女に会いたかった。

叶わぬ願いを胸に抱き、敵陣に突っ込む。

さうば愛しき人よ…次は穏やかな時代で逢いましょう。

そして少年は敵の中へと消えていった。

それが英雄と呼ばれた少年の最後だった。

## 第壱話・いつもの日常？

時代・現代

\*\*\*\*\*

時刻は午前5時、まだ起きている人も少ない時間帯。そんな中、一人の少年は悩んでいた。

「……」

台所に立っている姿は何かを料理する様子ではあったが……

「…材料がない」

ある意味深刻な悩みであった。

「これはピンチだな」

少年にとって、これはかなり重要らしい。

「これじゃあ、お昼の弁当と晩ご飯が無いな……」

だが、無い物は仕方がない。

「仕方がない、今日は昨日の残りで、後は帰りにでも

そつ思つて仕度に掛からうとしたが…

「ねえ、優にい…」

いきなり後ろから声をかけられた。

そこにはちょっと暗い雰囲気がだが、かなり可愛い子がいた。  
身長は僕と殆ど変わらないくらいで、髪は長く黒い、そして前髪が  
完全に両耳を覆っていた。

ちよつとびっくりしたが、いつもの事なので気にしないで言つた。

「どうしたの皐月、何か用か?」

「優にいが何かブツブツ言つてたから…」

なるほど、聞こえてたのか。

「いや、別に気にしなくていいよ」

そつ言つて、また仕度に掛からうとしたが…

「優にい…私に出来ることがあるなら……言つてね」

そつ後ろから囁かれた。

身長は僕と殆ど変わらないので、その囁きが僕の耳元で聞こえる。  
…ちよつと恥ずかしい。  
だけど、それよりも嬉しい。

「うん、分かったよ」

「… そう… じゃあ、後で…」

そう言つて、一階の自分部屋に行つてしまつた。

そつ言えば朝から忙しかつたから田口紹介が遅れてしまつたな。

僕の名は、月見 優貴

高校一年生。

こんな女子みたいな名前だが、僕は男で。

身長は165cmとちょっと低め…かな?

特徴はこれと言つて無いが、眼鏡を掛けている…ってこれつて特徴かな?

髪の色が少し白いのが特徴だ!（普通はこれ特徴だよな）あと、少しだけ合氣道が出来るくらいかな?

そして先ほどの女の子は、月見 露月

高校一年。

僕の自慢の妹だ。ちょっと暗い感じだが、とっても優しい子だ。それによくもてる。

可愛いからかな? だけど悉く振つている。

細かな理由は聞いても教えてくれなかつたが、今は別に付合つ気は無いらしい。

因みに、僕等の両親は5年前…とある事故で他界してしまつたため、今はご近所さんに少し厄介になつていて。

そして、一人でこの家で暮らしている。

料理は一人ともするが、露月は部活に入つてゐるため専ら僕の仕事だ。

そして今、朝ご飯を作つてゐる所である。

「やつぱり日本人は朝は『』飯とみそ汁だな」

まあ、昨日の残り物だけど。  
そしてこの時間帯になると…

「……おはよー、優にー」

学校に行く仕度をした皐月が二階から降りてきた。

「おはよう、忘れ物無いか?」

「……うん」

「くつとつなずく皐月。

「…優に…も…準備しないと…」

そうだった、自分の事をすっかり忘れてた。

「じゃあ、先行っていいよ

「…わかった」

そして僕は二階の自分の部屋に…

「……」

…僕の部屋のベットに誰か寝てるんですけど。  
まあ大体は予想がつくが、一応確認のため、ベットから布団をどか

すと…

「おはよーー 優貴」

そこにはとても綺麗な人がいた。

「…龍之さん、こんな所で何やつてるの?」

彼女は龍之 りゅうの 由美 ゆみ

僕と同じクラスで、かなりの美人だ。

黒く長い髪を後ろで纏め、整った顔立ちに鋭い目つき。

まあ俗に言う和風美人って感じですね。

学校でも街でも色々な意味で有名な優等生で、いつも周りの人たちの噂になっている。

…けど、とても変わってる。

なにが?と言われば…一言では言い表せない程ことしか言つようがない。

そんな彼女がなんで僕と知り合いなのかといつ…

「あれだ、将来を誓い合った仲とでも言つておひつ」

「勝手なことを言わないでください」

全否定します。

「なんだと! あの時言つた事は嘘なのか!-?」

勝手に逆切れしないでください。

「そんな事言つた覚えはなです。勝手に捏造しないでください」

「うひ、別によいではないか…」

そう言つてベットから降つて。

「私の朝ご飯はあるか?」

と聞いてきた。

つてか図々しいですよ。

「自分でやればありますよ」

「ついでくれたつて別によいではないか…」

「僕は今から着替えて学校へ行く準備しないと……」

つて途中から殺氣が…

「ほう、着替える…か、なら既成事実を作るチャンス?」

顔を赤らめて言つている龍之さん。

それより、なにヤバい事を言つて…

「そりゃ…！」

「うわっ…！」

勢いをつけて僕をベットに押し倒した。

「ああ、こや…！」

いや、ちょ！ までいい！！

そう思つた瞬間…

ピコリコリ！…！

と僕の携帯がなつた。

ナイスタイミング！！

誰か知らないが、ありがとう…！

「ほら！ 携帯なつてるから！ それ取るから！」

そう言つて押しのけて携帯を取つた。

そしたら不気味な声が…

「お……家の娘に手を出さうとは……言こ度胸しどるな、小僧

どこから聞いても、この声は堅気の人が出せる声じゃない。

それに僕は手を出しません！ あちらからです！

「いいか、もし……もしか、手を出すんならそれなりの覚悟つち  
ゅうもんが…」

つて所でいきなり声が入れ替わつた。

「あんた！！ なにしとる！？」

「い、いや……ちょいと男同士の会話を……」

「ふざけてないでかしなーーー！」

「あー、ちよつとまだ…」

「五月蠅いーーー！」

【グシャツーーー】

…なんか今、撲殺したよつた音が…

その音と共に声は消えた。  
そして変わって、女の人気が。

「『1』めんね家の夫が…そつちは気にしないでね

そう言つて切れた。

「…………」

あつちは何があつたんだ？

微妙に気になるところだが、あえて触れない方がいいかもしれない。

「…優貴よ」

そう思つていた時、いきなり声を掛けられた。  
かなりビックリした。

「ど、どひしたの？」

「…遅刻するぞ」

そう言つて時計を指した。

現在 8時30分。  
完璧に遅刻。

ପାତା ୧୦୦

やうに書ひてもざいにもならない。

一氣にするな」

「法華經疏」卷第十一

…どうして僕の日常がこんなになってしまったのだろうか？

それは、約一週間ほど前のことである……が。

「これは次回へ続く！！」

「え？ なにこれ… 今更なのー？」

【次回へ続く!】

## 第3話・事の始まりは…

この物語の始まりは一週間前に遡る…

＊＊＊

その日は日曜日でとっても良い天気だったそうな…

「いや～こんな日は洗濯日和だな～」

などと朝っぱらから主夫全開で言っているのは、一応主人公の月見優貴である。

「こ～んな良い日はきっと好いことがあるだろ? な～」

な～んて思いながら朝ご飯を作っていたら…

ドカアアアアアアアアアア…!…!

朝っぱらから、何かが景気よく突っ込んで来たような激しい音がした。

「……朝っぱらから何事?」

音はかなり近くで聞こえたような気がしたけど…  
そう思つてベランダに出てみたら

なんと自分の家の塀に黒塗りの車が沢山突っ込んでいましたとさ

「…………こやこやこやこや、あり得ないって……」われはさうと驚でしょ

いくら疲れてるからってこれはないだろ?

…………最近、張り切りすぎたかな。

そう思つてしまはらく戸を開けて、また開けたけど

「…………」

わざと状況は変わらなかつたとさ。

「嘘だろおおおおおおおおお…………」

まだローンが15年程残つてゐるのに…  
いきなりピンチになつたよ、家計が!  
急いで玄関まで直行!

…の前に

「…………優にこ……おはよう

今さつきの音で田が覚めたのか皇月が起きてきた。

……つーか、今までずっと寝てたの?

そんな僕の考えをよそに

「どうかしたの……優にこ?」

首を傾げる姿は愛らしげ今はそんなときじゃない。

「おはよつ皇月、朝ご飯はひよつと待つてね

それだけ言つて僕は下まで降りて玄関へ直行。

文句の一つや二つは言つてやらねば！

そつ思いながらドアを開けると…

『…………』

ごつこ顔をしたおじさんやお兄さんの方々がいましたとさ

「…………」

無言でドアを閉めてチョーンロック！

「…今のはなに？」

マジで恐かったですよ。

それより僕、なんか悪いことしましたか？

「…どうしたの優にい？」

皇月が僕の方に来ながら言つた。

「来るな皇月！ 今は来ちゃダメ！」

そつ言い返すが効果なし。

既に僕の田の前に来ちゃいました。

「…優に…何か変な汗出てるよ」

そう指摘されても仕方がない、だつてあれはいきなりでインパクト  
強すぎですか。

「皐月、居間の方でチョット待つてね」

そう言つて奥に押しやる。

- ? ?

首をかしげながらも、素直に聞いてくれてたすかつた。  
さて…

11

今のはビックリしたけど…もう居ないよね？

- 1 -

団体さんがこつちを凝視していました。  
しかもドアを開けた瞬間こ！

「ひいいいいいいいいいいいい！」

マイナビシティ！

しかもさっきより増えてるし！？  
なにこれ！？ なんなの！？

「……」Jは一端逃げるか?

なにも悪いことせしていないが、ここに面倒なつまらシだ。  
そつ思つて奥に行こうとしたら…

ドーンドーンドーン

…ドアを叩く音がしました。

「ひつー?」

いきなりドーンクリ  
つい悲鳴が出てしました。

ドーンドーンドーン

だがそんなのはお構いなしにドアは叩かれる。

…速く逃げなければ殺される?

脳裏に東京湾に自分と臈肉が沈められる映像が流れちゃいました。

…最悪だ…

一刻も早く逃げなくては…!

だが時既に遅し。

ドカアアアアアアアアアアアアアアアアアアン!…!

と、なにかの一撃とともにドアが吹っ飛びました。

……が

「え、ええっ！？」

それよりも驚いたのはもつと他のことだった。  
何故かつて？

だつて、そこにいたのは恐い人たちの中に唯一女の人居たからだ。  
それにその人は見覚えのある人だつた。

「……なんで龍之さんが？」

そう、そこにいたのは、僕と同じクラスの龍之由美さんだつた。

## 第参話・どうにもならない流れ

りゅうのゆみ  
龍之由美

凛々しい顔立ちに鋭い目つきにファッションモデルのような肢体。黒く長い髪は邪魔にならないようにと紅い紐で一纏めにしているのが特徴。

学校では和風美人として有名。

スポーツ万能。文武両道。生糸の箱入りお嬢様。  
男女問わず絶大的な人気を誇る。  
性格は家庭的で世話好き。  
そして学園…いや、日本最強の剣術。  
まさに無敵の超人である！

……と僕は聞いた事がある。

実を言うと、自分のクラスの人だが、僕はあまり興味がなかつたのでよく覚えていない。

と言うが、クラスの人の名前もまだ覚えていないのにこれを覚えてるのは奇跡に近い。  
もの覚えは悪い方ではないが、なんというか…青春より家計が優先？つて感じだから。

「……で？」

そんな人が何故ここに？  
しかもとつても恐い人達をつれて

「……」

黙つて立つてゐる龍之さん。  
周りにいる恐い黒服の人達。

……強盗ですか？

一瞬そんな言葉が頭を過ぎつた。

「……優にいどつたの？」

居間の方から声がした。

そう言えれば皇月が居るのをすっかり忘れていたよ  
かなりでかい音だったのでこっちに来ようとしている  
……まあ普通あんな音がしたらこっちが気になるよね

「来ちやダメだ！」

「……なにが？」

一応、反応はしたがもひつちに来てしまつて……

「……」

一時停止した。

と詰つかシヨートしてこるような感じだ

「……これビリしたの？」

田を白黒せながら皇月はそれだけ言つた。

……そうだよね、こきなりこれ見たらしきつた反応するよね  
だけど僕も知らないけどね

「……それは私から説明しよう」

その時やつと龍之由実は口を開いた。

「だがここでは説明できない。よつて、月見優貴。君ここはちよつと私の家に来て欲しい」

それだけを言つと

周りの黒服の方々に腕をがつちり捕まれて強制運行態勢へ。そして皐月はと言つと……

「……優ここをよろしくお願ひします……おやすみ……」

特に心配した様子はなく、龍之由実はそれだけ言つて家の奥に入ってしまった。

「あれ？ そんだけ？  
つてかまだ寝ぼけてる！？」

「うむ。わかつた」

そんな寝惚けている皐月に律儀に返事を返す龍之由実。

そして僕は車の中へ連行されていった

「……その前に僕に拒否権はないの？」

「しそばりへして～

見事にでかい和風建築（京都とかにありそうな感じ）の家につれてこられた。

……」「ひつて確か、龍崎組つて所じやないかな？

龍崎組

それはこじら辺を仕切つているちよつとあれな感じの強面集団。時々警察や他の組から殴り込みやその他事件があつたりする所。まあ、つまりヤクザさんつてやつですよ。

「…………」

なんだかメツチャ嫌～な予感がするのは僕の氣のせいですか？

「ああ、ひぢりへ……」

そつ言われて中につれて行かれる僕。

玄関前まえまで連行されていき、そのあと龍之さんが出で

「御苦労だつたな、後は私に任せろ」

『ウいつスー……』

と言つてのでやつとのこれ黒服の強面男達に解放された僕。……なのだが、帰り際に龍之さんには聞こえないような声で……

『言つとくけどなあ……お嬢に手ぇーだしたらただじやスマセへんからな……』

『オンドリツヤ わかつとんのかボケえ…』

『お前はビリの海が好みなんや… 場所ぐりこは選ばせたる』

『ときどき癖でな… はじき（拳銃）が暴発するんや…』

『事故ばざりもあひむかいなあ… 『氣いつけや』』

などなど… 物騒なことこの上ない言葉をもらつた。ありがたくない…  
つてか、僕はここから無事に帰れるのか？

そんなことを思いつつ、さらに歩いていくこと数分間。  
しばらく歩いて行くとある部屋まで連れて行かれた。  
その襖に向かつて…

「父上… 母上…」

そう龍之さんと書つた。

確かに書つた。

父上と母上つて確かに書つた。

……つて…！ いきなり両親ですかい…？

「おひ入れや」

中からとても野太い声がした。

… どう聞いても堅気の人が出せる声じやない。

そして龍之さん襖を開けると…

「……ふん」

「……」

そこには今までの黒服の男たちには比にならない程のがたいで、通常の3倍割増しで目つきが悪く、顔に十字の傷が入った男性と、凜々しい顔立で着物を着たかなりの美人な女性がいた。

「ただいま帰りました」

そしてその後に続いた言葉がとっても重要、かつこれらの原因であつた。

「私の彼氏を連れて来ました」

「……へ？」

僕はあたりを見回す。

けど、僕以外は目の前の「両親しかいない。ではどこにいるんだ？」

そう思ついたら龍之さんはもう一度いつた。

「この人が私の彼氏です」

彼女は僕を見ながらハツキリとそう言った。

#### 第四話・予想を超えた条件

事情と言つのは誰にでもある理由のひとつである。だけどそれが解らないのであれば意味がない。特に今がその事態だつた。

「…彼氏?」

「一体何を言つてゐるのだ?」

「…ほう…此奴がか?」

その男性は僕を見てやつと/or/言つた。  
い、いや…あの…そんなに睨まないでほしいです。  
なんというか、ものすごく怖いんですけど。

「……」

もう一人の女性は黙つたままで静かにこいつらを見つめてゐる。

「はい。やつです」

龍之さんはハツキリと答えた。

その言葉には迷いなどがなかつた。

まあ、別にそれはいいんだけど(いや、本当はよくなじむ)…

「…何故に?」

一体全体どうしてそうなっているのだ？

「あー… あ~れあああああああああんん…」

メツチャクチャでかい罵声に僕の声はうち消された。

「儂は認めん……ぜつづつつつつつみたいにだあああああ……」

さらばでかくなつていく声。

そして急に止まつた。

「… そ う か …」

なんだかよく解らないが大人しくなつたみたい。  
…と思つたら。

「！」の男を消せばいとも簡単に問題解決ではないか…」

メチャ物騒な事を言いだした。

だつてこの人、目が血走つてゐる。

僕が小動物に対してもつちは肉食恐竜…

れで どこから取り出したのか、いつの間にか日本刀（菊一文字）が握ら

僕の方に振りかぶ……つてえ！？

「わあ！？」

間一髪避けた。

僕がいた畳には無惨にも真つ二つになっていた。

「……何故避ける？」

目を血走ったまま意味不明な事を言ってしまった。

「死にたくないからです！？」

ちゅうと泣きたくなつてきた。

「じゃかしい！… ならかわと泣えりおおおおおおおお…」

そのまま振りかぶつた。

「あなた、いい加減にしなさい」

となりに座つている女性がさつ言つが…

「死ね！」おおおおおおおおおおおおおおおお…？」

全然聞いていないようだ。

もう自分の世界に入りきつている。

そんな男性を余所に、となりに座つて居た女性は軽い溜息をついて…

「つりや…」

その掛け声と共に首筋に手刀が打ち込まれた。  
いや、正確には殴り付けたって感じだ。

「ガハアッ！？」

それと同時にその男性は倒れてしまった。

「…」それでよし

満足そうに頷いた。

つてか、いいのかこれで！？

まあ命は助かつたから僕は良いけど…

などと思つていたら。

「あ。これは気にしないでいい」

落ち着いた様子で座つている龍之介さんに言われた。

「これはよくある事だから」

…よくある事？

つっこみ所が沢山あるがもう野暮用つてこと。  
まあ、実際助かつたんだし。

「…それより僕はどうしてここに連れて来られたの？」

そつ、本題はここだ。

僕はどうしてここに連れてこられたか？  
それが今知りたい。

それに僕が彼氏ってどういうこと?  
そのことを龍之さんに聞いたら…

「そっ、それはだな…」

顔を顔を赤くしながらなかなか言わない龍之さん。  
急にどうしたの?

そんな僕達を見てその女性がくすくすと笑いながら

「まあ貴方もちよつと落ち着きなさい」

そつと睨められた。

「そつと言えば、まだ血口紹介してなかつたね」

そつと睨みてその女性は頭を下げながら…

「私の名は龍之<sup>りゆう</sup> 牧江<sup>まきえ</sup>と言います。これからもよろしく

そつ言つて……えつ?

…今なんだか龍之って聞こえたような…

「あ、あの…お姉さんですか?」

「つふふふ、そつ見える?」

上品な笑いをしながら、何故か嬉しそうに笑つている。

複雑そうな顔をしている僕に、龍之さんが重要な事を言つた。

「…私の母親です」

そう言つた。

確かに母親といつた。

間違いなく、母親といつた…

「わ、わかすぎるーー！」

思わず声に出でしまつたがそんなのはどうだつていい！  
だつて、どう見たつて二十歳前後にしか見えない…  
そんな僕の反応を見ながら…

「お世辞が巧いね、君は」

などと言つて嬉しそうにしている。

や、別にお世辞じゃなくてそのままの感想なんですけどね。

「で、こいつで寝ているこれ（夫）は龍之りゅうの 龍馬りょうまと言います」

先程首筋を打たれたまま倒れている人物を指していった。

「…………」

勿論、倒れているので返事はない。

なんか扱いが適当に見えるのは氣のせいか？

「う…」

意識を取り戻したのか声を上げてきて…

「どうやあーーー！」

龍之さんが思いつきり殴つた。

殴つた！？

「グハツー！」

そしてまた意識は闇の中へ…って

「何してるのーーー？」

実の父親にーーー

「ん？ トドメを刺しただけだ」

当然そこに言つた。

「…………」

やはり、扱いは酷いものであつたか…

哀れに思いながらも、これはもう無かつた事にした。  
だつてまた殺されかけたらたまたもんじゃないから。

「じゃあ、今度は君の自己紹介ね

その様子を見ていた筈なのに、何も突つ込ま無かつた龍之母が言つた。

この人もこの人で問題があるよつた気がする…

「えつと…僕は龍之さんと同じクラスの、月見優貴と言います」

軽く礼をしながら言った。

「おお、礼儀正しい」

嬉しそうに囁き龍之助。

なんだかやけにテンションが高いのは氣のせいかな？

「成る程…円見優貴って言つのか…円見…どうつで…だな…」

小さな声でぶつぶつと何か言つながら。

「…でだ。どうせ由実の事だから、何も教えずにここに連れて来られたんでしょう？」

そつと龍之助を見て言つた。

「…………」

黙つたままで龍之助も答えなかつた。

なんだか見透かされたような感じだ。

さすが母親…伊達に娘を育ててているわけではない。

「あの子…由美はね、実はお見合つするはずたつたの

…はい？何ですと？

お見合いですと？

お見合いつていえばあれだ。

よく結婚をするためこやつのイベント…みたいな感じのやつ。

「はあ……大変ですね」

本当に何考へてるんだかね、大人つて奴は…  
そう思つて龍之さんを見たら…

「……母上…」

メツチャヤ不機嫌そうな顔を龍之母に向けていた。  
まるで『余計なことを言つた』とでも言つて居るよつた感じで睨んでいた。

「あら？ 言いたい」とがあればいいのに?」

にやにやしながらそう言われて黙つてしまつた。  
どうやら母親には勝てないらしい。

「まあ、そこは色々と…な」

そつ言つて親子での会話は終わり

「さて、丹見さん…でしたよね?」

「はあ…わづですけど…」

「先程は」迷惑をおかけしました」

深々と頭を下げる。

「い、いえ! 別にそんな…」

じりもりする僕を見て。

「あははは、本当に月見君は面白いな、気に入ったーーー！」

笑われてしまつた。

何か手のひらで踊らされている感じだ：恥かしい。

「……母上、もうその辺で！」

そう言って僕を庇つてくれた龍之さん。

「あ、ありがと。龍之さん……」

ちよつと照れながら言つたり

「えつ！？ い、いや別にたいしたことじやない……」

顔を赤くして目を反らされた。

：僕つて嫌われてるのかな？

「…………」

それを見ていた龍之母は、またくすく笑つていた。

『…………』

いや、なんというか…恥ずかしい限りである。

「まあまあ、月見君はここに来た理由を知りたかったんだよね？」

そうです。全くそのと一つです。

「教える代わりに条件があるのだけど……いい?」

いきなり真面目になつた龍之母。

「はあ? 別にいいですけど……」

適当に答えた

どうせ大した条件じゃ無いと思ったからだ。

「……本当に? 破つたりしたら殺しこべるよ?」

嫌なたとえですね

そして笑えない……なんか本当に実行しそうだから。  
けど僕は了解してしまつた。

「大丈夫です」

ハツキリとそう言つてしまつた。

「そう……」

意味深に頷き

「……では月見優貴よ、私の娘、龍之由美と結婚しなさい」

僕の想像をはるかに超えた条件だつた。

「…………は?」



## 第五話・「これは夢? それとも…」

人生色々あるがいきなりこんな事を言われたのは初めてだ。  
まあ普通は「こういった経験はしないであらう。  
つてか、夢であつてほしい。」

「…結婚?」

「誰が誰と結婚するのか?」

「それは月見君と由美ですよ」

ほんわりと囁う龍之母。

「…くえ…」

やはり現実味のないことだらけだ。

……今日は現実的に有り得ない事が多いが、今度はまた一段と激しいな。

やはり最近張り切りすぎたんだな。

そしてこれは夢だ。きっとありもしない」と僕の脳が勝手に妄想しているだけで…

なんんてちょっと現実逃避をしてみたが…

「ほな、よりしいですね

やっぱ変わらなかつたりする。

現実つて厳しいですね~本当に~!

「いやいや……ちょっと待つて下さい。何でそつなるんですか？」

おかしいでしょ？ 現実的に考えてなぜに結婚話に？

まあ有り得ない話ではないが、今の状況からこの展開はおかしいと  
僕は思う……

そんな考えだけど龍之母はいたつて真面目

「……なにかおかしい所がありましたか？」

何処も彼処もおかしいです。

「その条件はどうかと思います」

いたつて普通の意見？を僕は言つた。

そう。僕は普通の意見を言つただけなのに……

「……では約束を破る……と？」

田つきが細くなつていくにつれ殺気が鋭く強くなる。  
それはもう気が弱い人だったら失神しちゃうんじゃない？ってなべ  
らしいの殺氣だ。

「……母上。ちよつとそれは強引では？」

今まで静かにしていた龍之母実さんが助け舟を出してくれた。  
けど、できればもう少し早くしてほしかった。

「……そりですね」

一応、娘の言葉を聞き入れた。

おかげで殺氣が弱くなり、少しは雰囲気が戻った。  
だが、それでも事態のピンチには変わりない。

「では、由実に聞きましょう」

僕から標的を代えた。

「由実……正直に答へなさい」

「……はい」

少し緊張が走る。

龍之さんの顔にも緊張が出ている。

「……あなたは月見君の事をどう思つて居るのですか？」

「えっ！？ そ、その……どう…とかと」

僕の方をちらちらと見ながら言つが途切れ途切れになつてよく聞こえない。

「はつまつと言つなさい」

「あ、その……いえ……あれです……嫌いではない」

顔を真っ赤にしながら一応答えた。  
けどその反応を見た龍之母は…

「……では好きでもないわけですね？」

## その言葉を聞いた瞬間

「そ、そんなわけではない……」

そう叫んだ。

「あつー…?」

そしてただでさえ赤かった顔はさらに赤くなり……

「へへへへへ……」

なんだか泣きそうな顔になってしまった。

その反応を見た僕は可愛いな……などと場違いなことを思つていてました。

そんな反応をまるで予想していたかのように、龍之母は一ヶ口と笑い

「ほひね。そつまつ」とだから

ここに僕に言つた。

「…………えつ?」

……なにがそつまつことなんですか?  
僕にはそつぱりですけど?

そんな僕の反応に気付いたのか龍之母が……

「…………もしかして気付いてないわけ?」

ちょっと驚いたように聞いた。

「何がですか？」

なんだかよく状況が解らないんですけど……

僕が複雑そうな顔をどう取ったのか知らないが、龍之母は龍之さんに「…由美。あんた苦労するわよ」

ちょっと同情した目で見られた龍之さん。

「……」

さつきとは打つて解つて不機嫌になつた龍之さん。

…ってなんでそんな目で僕を見るんですか？

そんな疑問に龍之母は一言。

「それは月見君が悪いから」

だそうだ。

一体全体何処が悪いのかな？

などととんちんかんな考えをしていた。

「…」ほん。ちょっと話がずれたけど本題にもどります

まあ、今まで話がそれていたのだからちょっとは真面目にしないとな。

「……一人の意見から、結果的には結婚は早いと言つてますが

恋人からつて条件でいい?「

「うーん…僕は別にかまいませんよ」

それだつたら何となくよい気がする。

「…………いいです」

一方、こちらは不満なのがひとつ不機嫌そうに答えた。

「じゃあ、今日はお開きつて事で…」

そうつて龍之母は龍之父の襟を持ち引きずつて出でていった。

「あ。そつそつ…」

また帰つてきた。

「今日は遅いから泊まつていきなさい」

それだけを言つて出てつてしまつた

…………つて! え!?

「ちよーちよーと待つてくださいーーー」

僕が帰らないと臥田が心配するし、向ひつこに連れて来られた理由を聞いてない!!

それを言つもつで廊下に出るが…

「……こない?」

さつきまで畠たばすなのに、もとからいなかつたかのよう消えてしまった。

「…そして僕はどうなる？」

そんな疑問に答えてくれたのは龍之さんだった。

「…心配するな、一応連絡はしておいた」

さつきで携帯を閉じた。

さすがに仕事が速いな

「それに今日は色々あつただろ？ 明日も休みだし今日は泊まつていけ

とかなんか言つてることは、僕は既に泊まる前提なんですか？

「…………」泊まるのは嫌か？

少し不満そうに言つてきた。

「いや、そんなことはないよ」

因みにこれは本音。僕はいつもたたか（平屋）は好きだから泊まると言えばうれしい。

けどさつきの人たちに闇討けされそうで怖い。

「ならよかつたよ

さつきで笑つた。

今の笑顔は最高に可愛かった。

その笑顔に僕はつい見とれてしまつて…

「…可愛い」

思わず頬に圧こつまつた。

「えー?」

「あー?」

その瞬間、龍之さんは顔を赤くしてしまつた。  
言つた僕もしまつたと思った。

「…」

「…」

お互に沈黙する。

そして何故か顔を赤くして龍之さんは周りを見て…  
不意に龍之さんが近づいてきた。

「…? どう? どうしたのー?」

かなりドキドキする。

「…動くな

そして左の頬に手のひらが来て

「…？」

頬にキスされた。

それは一瞬であつたが頬に触れた柔らかな感触。まるで長い時間が過ぎたかのように思われた。

「…………え…………つと…………」

真っ赤になつたまま何かを言おうとする龍之さん。

「いや、これはだな……その……今日、色々迷惑を掛けてしまつたお礼……だ」

それだけを言い切つて

「で、では……また明日」

出でていつてしまつた。

「…………」

…今は現実なのだろうか？

その頬に残された感触に戸惑ひばかりで、そのあと的事は殆ど覚えていなかつた。

## 第六話・なんだかんだで似たもの同士

色々あつて現在月曜の朝。

まあ実際、昨日は本当にやばかった。

龍之さんの家に泊まつたのは良いが、あのあと龍之父に闇討ちされるわ、その他の部下っぽい人たちにガンをつけられるわで生きた心地がしなかつた。

まあ他にもまだあるが、もう思い出したくない。

そんなこんなでさつと言つたとおり、今日は月曜日。

今日は皐月は部活な為、朝早く出ていて、ついでに僕も気分転換かねて朝早く学校に来たのは良いが……

「……………相変わらずやばいな……………」

机に向かつて一生懸命に電卓で計算する。このノートの表紙に書かれているは家計簿。朝から気分転換した意味がない。

「…………今月はいいとして、来月が結構きついな

毎度の事ながら家計は大変である。

赤字にはギリギリならないが、これと言つた黒字にもならない。

まあ今はこれで良いのだが、後々のことを考えると少しでも貯金はしておきたい。

それが僕の考えだつたが……

「…現実は厳しいなあ

そのまま頭を机に突つ伏す。

まあ、現実なんてそんなものである。

「…源信さんに言つてバイト時間増やして貰おうかな

な～んて考えている最中

「なんだ…また赤字か？」

前の方から聞き慣れた声がした。

顔をあげてみるとそこには見慣れた人物がいた。

「…やあ、賢治おはよ～」

彼の名は宮田 賢治

僕の親友で中学生からの仲だけど、僕は賢治とは同じ中学じゃない。バイト先の酒屋の宮田 源信さんの息子だったから知り合つたのだ。

「お前も大変だな…親父や母さんが言つてたぞ『家に来ないか?』

つ

言いながら前の席に座る。

そう、酒屋の源信さんや賢治の母親は僕の身なりを知つてか、いつも気を使って貰つている。

そのおかげで給料も少し多めにして貰つたり、色々な物をおそらくして貰つたりと本当にありがたいことばかり、それに賢治も何だかんだ言つていつも心配している。

「嬉しいけどいいよ。迷惑になるだけだし、今まで暮らせないことはないし」

机に突つ伏したまま「言」つ僕

「…別に迷惑だなんて思つてないんだがな」

溜息混じりに「言」つ賢治。

「ま、お前さんがそいつなら別にいいがせ」

そう言つて席を立つた。

「ん? どにいくの?」

その質問に対しても

「……また呼び出しだよ」

苦笑混じりに「言」つ。

「成る程……相変わらずもてるね」

そう賢治はよくもてる。容姿も良いし、性格も素つ気ない感じだが  
気配りがよく優しい

それに運動神経も抜群で成績も上位にランクしている。

バイト先に彼が居たからよいものだけど、それでなかつたらきっと

接点なんてなかつただろうなあ……

因みに僕は成績は真ん中を行つたり来たりの微妙な感じだ。  
運動神経も人並みの一般人。人生つて不公平だな……

「そう言つわけだから、またあとでな」

そつ言い残して教室を出でいった。

賢治が出ていったあともつ一度家計簿を見直す。

「……」

何度見ても数字は変わらないのだから虚しい物だ。

まあ、そんなこんなでHRの時間になつたのだが……

そんな時に事件が起きた。

主に僕を巻き込んだ事件が……

「え、今日はこれと言つた連絡はありません……」

今前に立つて話している人は我らの担任、有馬ありま浩介こうすけ担当は歴史若手の先生で生徒からの人気が高い。そして思いこめば何処までも自分の道を突き進む人物でもある。

「そんな訳だからあとはよろしく月見ーー！」

「……は？」

いきなり僕の名前を呼ばれた。  
何がよろしくですか？

そんな疑問を余所に

「あと……龍之もな

それだけを言つて出て行つた。

僕がまだ疑問に謎めいているとき。

「…お前聞いてなかつたのか？」

あきれたように賢治が聞いた。

「お前、今日は日直だろ？」

「…そうだけど?」

それがどうしたんだ?

「だから、今日の五時間目に歴史で使う教材を社会科準備室から持つて来いってことだよ」

なるほど~

……あれ?

「さつき龍之さんもつて言つたけど?」

「一人で運べないから、龍之さんも一緒に連れて行けって事だろ」

流石がとういか何というか理解力があるな本当に。

「そんな訳だから頑張れ」

そんな訳つて言われてもね~

ちらつと龍之さんを見るがこれと言つた変化はない。  
本を読んでいるのか、周りに関せず静か日を通している。

……そう言えば家に連れて行かれたあの時は凄く可愛かったのだけ

どな…

昨日の出来事を思い出していたら、あの時キスされた事まで思い出してしまった。

「……お前大丈夫か？顔が赤いぞ？」

賢治にそう言われ、無意識に自分が顔を赤くしていた事に気付いた。

「えー？ そつ、 そうかな？」

「… 何故焦っているんだ？」

「あ、 気のせいだよ！」

そうは言つが僕はまだ赤いままだつた。

そして僕はそれを誤魔化すのに必至だつたために気がつかなかつた。いつの間にか僕の方を龍之さんが赤くなりながら見ていた事に……

## 第七話・予期せぬ事態

場所は社会科準備室。

そこは薄暗いが田端たちはそこそこ良くて結構居心地がよい場所である。

そんな場所で月見優貴は焦っていた。

目の前には田を開じた少女がいた。

勿論その子は僕が知らない子。

顔立ちは整つており、一目で見てもかなりの美人と言つても良いくらいの容姿だ。

だが反応がいまいち無い。

まあ別にそれには問題ない、その今の状態に問題があるので。

その状態とは…まあ、何というか仰向けになつた少女に覆い被さっている状態、どどのつまり押し倒している状況。

「な、なんでこんな事に？」

本当に何でこんな事になつたのかと言つと、それは今から少し前のことでした。

社会科準備室は一郎棟の一階にある。

あまり使われていらないせいか埃が溜まつており、ちょっとかび臭いところでもあつた。

そんな中、ちょっと隣を見てみれば…

「……なんだ？」

龍之由美さんが本を整理していた。

その距離はなんと10cm…かなり近いです。

「…別に文句はあるまー」

そう言つてまた作業に戻つてしまつた。  
うーん…確かに文句はないけどさ…  
あの時のこと思い出しちゃうんだよね  
そう思いながら見ていたら

「……すまないが、あまりこう見れないでくれないか?」

顔を赤くしながらソファに這つてきた。

「ノノ、ノーメン…」

「い、いや…別に見ていて悪い訳じゃない」

わざと顔を赤くしながらソファに這つてきた。  
それにしても、やたら顔が赤いな…  
もしかしたら風邪なのかも知れないな。

「…ちよつと籠れさん」

「なんだ?」

「ノーメン」

「ん?」

そして「ノーメン」を向こうた時に

「「」ねん

龍之さん額と僕の額をくつつけて熱があるか確かめてみた。

「つー?」

龍之さんは驚いたようだが、別に嫌がつていいのみじやなかつた。

「.....」

うへん……ちよつと熱ほいようだな。  
保健室にでも行かせようかな?  
そして頭を放したら

「.....龍之さん?」

なんだかボーッとしているみじやに見える。  
やつぱり熱があるのか?  
そう思つて名前を呼んでみたが……

「.....」

見事に無視された。

「...龍之さん...」

今度は強めに言つてみた。

「.....」

華麗に無視された。

なんども無視されるとちょっと悲しいぞ…

それとも僕って嫌われるのかな?

そうネガティブに思い始めたとき

「……由美…」

「……はい?」

「……ほかの奴らがいないときに私を呼ぶときは由美と呼べ

顔が赤いままでそのように言つた。

……いやいや、女性を名前で呼べって僕はどうかと思つただけど  
だか、それを期待したように僕を見ている龍之さんがいる。  
……これって呼ばないとやっぱいけないんだろうなあ  
と言つわけだ。

「……ゆ、由美さん」

「……はい」

……ヤバい。なんか変な気分になつてきた。

なぜがドキドキしながらも本来の目的を忘れないように

「ね、熱があるみたいだけど…大丈夫?」

「……ああ…」

なんだかさつきよりボーッとした感じになつてこる。

本当に大丈夫かな?と心配し始めたとき

「……すまない、ちょっと保健室に行つていいか?」

そう言つて、僕の反応を聞かずにしてしまつた。

「…本当に大丈夫かな?」

今さつきまで反応を見るとかなり心配だつた。  
が、それから10分もたたない内に…

ガラガラ!!

勢いよく扉が開く音がした。

「ん?」

もしかしてもう帰つて来たのかな?と思つて見てみれば

「…ここまでは追つてこないよね」

龍之さんではなく、違う女性がいた…  
この人もかなりの美人さんだ。

「…あつ…?」

その女性と見事に目があつた。  
何だが焦つているようにも見える。

「…嘘!…」には人が居ないと思つたのに…?」

ビッククリしたと思つたら困つてこらよつだ。

「あー、あみー、少し！」でかくまつてー？」

それだけ言つて入り口から見えないように机の下に潜つた。  
それと同時にまたドアが開いた。

「おい！ ここに人が来なかつたか！？」

怒鳴るように複数の男子生徒が入つて來た。

「い、いえ、入つてきてしませんけど……」

あまりの迫力にちょっとビッククリ

「つむじやないだらうなあ……」

脅すように僕を見てきた。

：かなり恐い。

けど、なぜか心の中で…妙な感じが…昔、これと同じ体験をしたよ  
うな…これつて「デジヤブ？  
そう思いながらも、ちゃんと答える。

「ほ、ほんとうですよ」

「……ふん。ならいい」

鼻で馬鹿にされたよな感じだ。

「まあ、沖田歩美様がお前のよつなへなりよ！」の粗手をなさぬと田

つていな  
いしな

〔二〕

馬鹿にされたような感じではなく、確実に馬鹿にしている。  
正直、かなりむかついたが…

「あ、そうですね…」

こう言つた時は大人しく引き下がるのが大人つてやつだ。

「おい、もしりに沖田歩美様が来たら直ちに連絡しろ」

正直どうでもいいが、早く何処かへ行つて欲しいので

「解りました」

と、素直に領いて置いた。  
それを見て納得したのか

「では、引き続き検索だ！――――」

そう言って全員連れて出ていった。

「……はあ、疲れた」

一気に疲労だけが押し寄せる。  
最近こんな事ばかりだ。

「……」めんね、本当に

あいつらが出て行ったのを見て、もつと全だと悟ったのか出てきた。

「本当に困ったもんだわ、私は迷惑なの」

なんだか独り言を言いながら愚痴を漏らしている。  
そこでふと疑問が浮かんだ。

「…あの女、どうして追われてるの？」

僕の疑問に彼女は驚いたような感じだ。

「私のこと知らない？ ほら沖田歩美って言つ人を」

一応脳味噌の中のデータを検索したが該当する記憶は前回無し。

「…」  
「やめん。知らないや

その反応に彼女は少し落ち込んだようだ。

「うう…そんな…これでも少しばかりは惚れないと想つたんだけどな  
あ

なんだか悪いとをしたような感じだ。

その僕の反応を彼女は見て少し笑った。

「ま、いつか。助けて貰ったしね

そう明るく言つて

「じゃあ、自己紹介ね。私の名前は沖田 歩美一応、アイドル歌手です！」

「…は？ 歌手？」

今なんだか歌手って聞こえたような…  
そんな反応を余所に勝手に話が進む。

「これでも売れてると思つんだけね～ほら『今月の一押し』って番組で注目度ナンバーワンとかも言つてたんだよ～」

すみません。非常にすみません。  
僕が見る番組はお料理番組とか温泉巡りの番組くらいです。

そんな反応に気付いたのが大人しくなつて

「…本当に知らないんだ」

ちょっと残念そうな顔をした。

「いや、いや…その…」めん

「なんで謝るの？ 別に気にしないよ」

ちょっと驚いたように囁つ。

「まあ、確かにびざんなんだつたけどね」

可愛く舌だして

「それに今私のことを知ったからもういいでしょ？」

「じやあ、今度は君の番」  
顔を近づけて聞いて。」

「いつ近距離になるとなんだかドキドキする。

「じゃあ、今度は君の番」

えつ？僕の番って言われても…

「僕は月見優貴」

「……そんだけ？」

「それ以外になにを言えと？」

「うーん…じゃあ、趣味とかは？」

「料理とか、家事全般…かな？」

「ふーん、じゃあ今度手料理食べさせてよ」

「うん、別にいいやべ」

「渋田さんと話しがのつてきていたのだが…

「いたか！…」

「いや、何処にも関ない！…」

「やつぱりつつきの部屋こったのです？」

「ああ、やつとやつに違いない！…」

そつ言つた会話が廊下の方から聞こえてきた。  
やつと先程の奴らの会話だらう。

「うわ、やばいかも！…？」

そつ言つてまた隠れようとしたが、その後ろの本棚に腕が当たつて

「ふえ？」

本棚が倒れてきた。

「あぶない！…」

そつ言つたのと同時に体を動かした。

彼女の腕を引っ張つてこちら側に引き寄せた。

…のは良かったのだが

「うわー！」

「やあやつー…？」

強く引きすぎたせいか、そのまま倒れてしまった。  
そして運が悪く本棚がこっちの方にも倒れて来て…

「うわー…？」

そつ思つが現実。

「へつ……」

倒れて来るはずの衝撃に備えて彼女の頭を抱えるよつこじて覆い被さつたのだが……

「……あれ？」

本棚は一向に倒れて来る気配はない。

「なんで？」

そう思つて倒れてくる方向を見たら、本棚は前の机に引っかかって巧い具合に倒れて来なかつた。

「はあ……」

なんだか頑張つて損したな。

「……ねえ」

下の方から声が聞こえた。

「ん？ ああああつ……？」

目の前に彼女の顔があつた。  
その距離なんと20cm弱

「う、ううううううめん……」

起きあがれうと頭を上げたら

「うつる！？」

「い、いたい……」

上の棚に当たつた。

「だ、大丈夫？」

「大丈夫です……」

本当は痛たいけどね。

そしてその時に授業が始まるチャイムが鳴つた。

「ちつ……時間が」

「今は皆教室に帰るぞ……！」

「今度はあっちの方をしらべるからなーー！」

そんな会話と共に彼らは去つていつた。

「……いったね」

「……」

ほのかに顔が赤くなつてゐる沖田さん。

そして僕を見たまま黙つてしまつ。

そんななか僕はと言つと考へていた。

「どうしよう」

彼らがいなくなつたのは良い・良いのだが  
僕等はどうなるんだ？

机と本棚に挟まれた状態で、彼女を押し倒したままの僕にどうしよう  
と？

そんな考えと共に時間は過ぎていくのだった。

## 第八話・事の事態は慎重に

人はある程度の事には耐えられるようになつてゐる。  
しかし、理性と煩惱との格闘の前ではそれらの意味がまるでない。  
それがまさに今がその時だつた。

「…どうしよう」

本当にどうしてこう不幸な事ばかり起つるんだろうなあ  
きっと何かが取り憑いているんだ。  
よし、今度お払いしてもらおう！  
そう心に誓つが、事態が変わるわけでもないので現実に戻ることに…

「大丈夫？」

下になつてゐる沖田さんから心配そうに言われた。

「大丈夫だよ」

表はね、内心はかなりやばいんだよね  
だって、沖田さんも龍之さんと同じくらい美人だしな。  
と心の中でそれだけ言つて…

「まあ、誰かが助けてくれるよ」

そう明るく言つが

「今は授業中なのに？」

当たり前の事を言われた。  
つてか、今が授業中の事をすっかり忘れていた。

「そ、そりだつたね」

なんだか恥ずかしい。

それに……

「……ん……あ……」

下の方から沖田さんの吐息や喘ぎ声が聞こえてくる。  
なんだか泣きたくなつて来たよ……

だつてこれじやあ拷問だよ？

僕は人付き合いは良い方じやあない。  
そのため女性ともあんまり喋らないし、ただでさえ、こいつた美  
人の人には耐性がない。

そもそも、こいつた出来事は初めてだぞ。

まあ、普通はこいつた出来事はないんだろうけどね。

……きっと賢治ならどうにかなるんだろうなあ

と今教室で授業を受けている親友の事を考えていた……？

「……ん？」

賢治？

……ああつ！？

そ、そりだ！ 賢治に助けて貰えればいいんじやん！

ならすぐに実行に移すべし！

「あつ、あのや沖田わん」

「ん？ 歩美でいいよ」

「はい？」

いきなり話がそれた。

「えつと…何がですか？」

「私の名前を呼ぶときは歩美でいいよ」

「い、いや、だけじゃ…」

「うーん。人前じゃ、沖田でいいけど、今は…ね？」

いや、ね？ って言われても…

…まあ、この際気にしないでおい。

そもそも龍之さんといい、沖田さんといい、最近の女子って名前で呼ぶことが流行っているのか？

って、今はそんな事を気にしている場合じゃない！

「え、えと…歩美さん？」

「なに？」

「僕の胸ポケットに入ってる携帯を取ってくれない？」

「い、いけど…何で？」

「それは今から助けを呼ぶから…」

つて途中まで話していたら。

「あつ、じゃあ取らなによ?」

何故か断られた。

「…………えつと……なんべ?」

「僕には断る理由が解らない。」

それに早くしてくれないと、僕の理性やらなんやらが暴走しかねないんですけど…

そんな思いを知つてか知らぬか。

「だつて、もう少しのままでいいじゃん」

楽しそうに答えられた。

いやいや、なに楽しそうに答えてるんですか?

僕はちつとも楽しくない!

今、理性を押さえるので精一杯なのこれ以上このままだつたらやばいことになりかねない!

「まあ、その時はその時で…あつ、やつなつたりやめんと責任は取つてね」

「…………あれ?」

なんだかもの凄いことを言つてない?

僕の一生が決まりかねないことになつてゐるよな?

「そんな訳で、よひしべへ

いやいや、何がよろしくだよー？

最近の女性はこんな人は、かりたな!!  
まさに強引な女性社会!!

…別の意味で日本の将来が心配だ、あと僕の未来も心配だ。  
それにこれ以上は僕が持たない。

「……仕方がない。こうなつたら」「

あれをやる！

「僕の潜在能力を自覚めさせて一気に一日二枚を打ちこなす  
さあ、今こそ本気を出すときだーー！」

ପାଇଁ କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର

僕は頑張る！

頑張るだのうか？

「つ、疲れた……」

所詮、無駄な事だつた。

だまだ力がない方なので  
持ち上がる訳がない。

「…やっぱり僕には潜在能力はないか」

当たり前である。

「……わざから向してるの?」

ちよつと呆れたように聞かれた。

「い、いやね、上の本棚を持ち上げたらどうにかなるかな~って思つてさ」

「で、どうにもならなかつたつて訳ね」

「おっしゃる通りです」

「わざと無駄なことはするなつてことだよ」

全然意味が解りません。

そんな事よりも僕は疲れました。

「わづ? なら元氣になるおまじないをしようか?」

意味深な事を言つてきた。

「へ? それほどんなおまじないですか?」

ちよつとは興味はあるので聞いてみた。

「わづふふふ...」

「ん?」

そう言しながら、両手で僕の頬を優しくむわ。

……」のパターンって…どつかであつたような…  
そつ思つた瞬間。頭を下の方へ引っ張られた。

「ふえええーー？」

そしてその下にあつた沖田さんの唇へ…つてー?

「ちょーー? ちよつと待つてーー!」

頭に力を入れて下に行くのを耐えた。

危うく僕の唇と沖田さんの唇がくつづくことになった

「…なに? どうかした?」

いや、どうせなんでそんな事になるんですか?  
それが知りたいですよ?  
だが相手には通じない。

「ん? 私のファーストキスだよ?」

見当違ひの事を言う。

僕はそんな事を聞いたんじやないだ。

「まあまあ、気にしない気にしない

そう言つてまた頭を動かそうとする。  
これじゃあ、意味がないそれに僕の理性が持たない…  
そつ思い始めた時

「…………なにをしている優貴」

突然、僕の名前を呼ばれた。

いきなり呼ばれたため、僕の心臓がびくっと飛び上がったような感じになった。

沖田さんもいきなり他の人の声を聞いたためかなり驚いた様子だった。

「……一体何をしているのか優貴？」

その声の主は本棚の隙間から僕等を見ていた。

その人物とは先程出ていってしまった龍之由美さんだった。つり上がった瞳は赤く燃えるように怒りを現していく。まあつまり、かなり怒っていたのだった。

## 第九話・選択肢に問題アリ！

「……で？ お前は一体何をしていたんだ？」

怒鳴つてゐるわけではない。

だけどその声には明らかに逆らつてはいけないと本能が訴えている。その声を必死に受けている月見優貴です。

現在、龍之さんに説教されています。

あの態勢から助けられたのはよいが、何故か怒られています。原因是色々あるが、あの時の状況が一番の原因である」とは言つまでもない。

「聞いているのか？ 一体お前は何をしていたのだ？」

かなり怒つてゐる龍之さん、その怒りは見ただけではつきりと解るオーラがでている。

「私は別に怒つてないんだ。ただ私が居ない間にじづしてこいつなつていたかを聞きたいんだ」

優しくにこやかに問いかけているつもりだろうが、目が笑つていなさい。

顔は笑つてゐるのに、明らかに目が笑つていない。  
それに声も笑つていない。

これは恐い、恐すぎる…

死神や閻魔様もしつぽをまいて逃げちゃうくらい恐い。

「え、えと…あれば事故だつたんですよ

あれとこには先程の事故のことである。

「それで？」

「あ、あれには一切やましい感情があつた訳ではなく

「だから？」

「やつはだから……って、沖田やんからも説明してくさー……」

なんだか苦しくなつてきただめ、バトンタッチ！  
しかし、その結果によつたらじて最悪な方向に行つてしまつた。

「あれやつだつたの？ 私は期待してたんだけどね

なーんて言つひやつたもんだから。

「ー..?..ー..?..」

無言で怒つボルテージが上がつてこゝへ籠わせら  
やばこーー これはやばすぎるーー

「貴様……何をふやけた事を言つてこる

もつすでに冷静さを失つておつ、顔が怒りで赤く染まつてこる。

「あら？ 別にじつだつて良いじゃない。あなたこは関係ない

今、明らかにあなたと言つていろを強調した。

冷静にだが、あきらかに挑発している。

「ふざけるなー。お前こそ優貴には関係無からつーー。」

「ふん。あんただつて円見君とは関係ないでしょつ。それともなに？ やきもち？」

……なんだかもの凄いことになつてきたぞ。

僕が一体何をしたんだ？

それになんで僕がそこで出てきたるするのかね？

神様に一刻も早く終わることを願いながらじばりく待つっていた。

～それからじばりく続き～

「貴様は一体なんだーー！」

「あなたこそ一体なんなのよーー！」

もう何十分たつただろうか…

二人とも終わるどころかヒートアップするばかりで、これ以上はオーバーヒートするんじゃない？ ってなぐらこやばい感じだ。さすがの僕もこれ以上はつき合に切れない。

つてな訳で、おとなしく退散だ。  
気配を消してそのまま……

「どこのへ行くのだ？」

「どこのへ行くの？」

一瞬にしてこちらを振り向く一人。

しかも、その目線があまりにも鋭すぎる。  
もう、鉄板だつて貫きそつとなぐらいだ…  
さすがにこれは命の危険を感じた。

「あ、いや、その、だつてねえ？」

もう、自分でも何が言いたいのかよく分からない。

そんな僕を見ていた沖田さんが急に「こいつは」と思いついたって表情をした。

「ねえ、月見君ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「こいつはかな表情で言つ沖田さん。  
だか、その表情とは裏腹に『絶対に答えさせぬまで逃がさない』と言つ意思がこめられている。

「貴様は何を言つているんだ？」

そんな顔をしながら言つが、目線でいいから少し黙つてと押さえつけられて…

「私と龍之さん…月見君はビッちが好きかな？」

凄い事を聞いてきた。

「な、なに…？」

驚いている龍之さん。

「は？」

ある意味、僕も驚いた。

これって究極の選択？

マジで答えるのか？

これはある意味、晩ご飯の献立を作るよりも難問だった……

## 第壱拾話・風のよつな出来事

月見優貴は悩んでいた。

そもそも、なんでこんな訳の分からぬい選択をしなくてやならないのかが不思議だが、こうなつてしまつたので仕方がない。……こや、本音を言えれば「うなる前にどうにかしたかつたけど、今わらわうにかなるわけがないのだからこは割り切つておく。つてか、それ以上考えたら何だか泣きたくなる。

「で？ 私と龍之さん……どつちが好き？」

その質問の内容が僕によく分からぬい。  
そう聞い「うとした」のだが。

「なー なにを馬鹿なことを…？」

龍之さんの顔に遮られてしまつた。

「そ、そもそもだなー うつむいた事は……」

「あらわい。龍之さんは月見君に好かれてる自信がないんだ？」

今のは明らかに地雷を踏んだ。

「…………ああー？」

龍之さんがドスの利いた声で思いつきり沖田さんを睨んだ。  
だが、そんなのはお構いなしに喋り続ける。

「やうだよね～別に貴方と円見君はぜりふでも無いわけだし……じゃあ、別に聞かなくてもね」

「……まて」

いつもの冷静な声ではなく、明らかに敵と見なした声だ。

「どうかしました？」

「うちも先程とは違つて、敵に対しての反応だ。

「ふざけるのも大概にしろ、貴様」

「あ～、別にふざけてるつもりはあつませんけど～？」

「なら喧嘩を売つていいのか？」

「別に～一貴方には関係の無い事でしょう？　これは私と円見君との問題ですから」

「……そ～か、なら関係が大ありだな」

「それはどうやら辺が？」

「ふん、私と彼は既に付き合つているからだー」

問題発言を…って、そう言えればそうでしたね。

色々な事があつたので、僕はすっかり忘れていたけど…

「へ、へえー」

なんかちょっと引きつった顔になつた。

「だ、だからといって、月見君が貴方を好きとは限らないでしょ？」

「なら本人に聞いてみるがよい」

自信満々に言う龍之介。

…って、結局はこうなるのか…！

なんだか話の流れ的に僕には来ないかな…って思つていたのに…

「そうね、そうしましょ」

しかも同意してるし…？

なんでこんな事を答えなくちゃいけないんだ…！

なんて今更叫んでも意味がない。

「月見君、本当は龍之介とは付き合つていらないんだよね？」

そう言いながら僕に近づいて来る。

それを避けようと僕が反対に動けば。

「愚問だな。私と優貴は付き合つていてる

などと言いながら、僕に期待するような視線を送りながら反対側も回避行動不可能な状態に。

…これって逃げ場なし？

「さあ…」

「答えてー。」

……これはどうを答えるべきなのか  
僕がそう考え始めた時だった。

ピン ポン パン ポン

何処かのデパートでよくなりそつたチャイムの音がした。

『え～本校生徒の呼び出しをします。一年A組の龍之由美さん、C組の沖田歩美さん保護者の方が来ていますので至急、校長室に来てください。繰り返しお知らせします～』

『…………』

二人とも固まつた。  
そして顔を見合わせて

「！」の続きはまた今度ね

「ふん、望むところだ」

そして……

「では優貴、また放課後だ」

「月見君また会おうね

そう言って二人は出ていった。

「…嵐の出来事つていつ言つうんだな」

なんだかほつとしたような。  
寂しいような…複雑な気分だ。

それからは何事も無く今日の学校は無事に終わった。  
しかし……一体なんであんな事になつたんだ?  
とまあ当の本人は気付いていなかつた。

今週は大変だつた。

何故か僕の席によく来るようになつた沖田さんと龍之さん。  
まあ別に僕としては話し相手が増えるでよかつた事だけど……

その日以来、何故だか男子には睨まれるし、怒鳴られるし、ファン  
クラブが色々と/orしてきたり（思い出したくない）

女子は女子でよく解らない事を僕に聞いたり、トトカルチョの為に  
ああしろとか（その他色々と）五月蠅く言われたりした。  
おかげで思いつきり疲れた。

何故こうなつたのかは原因は未だ不明。

一度、賢治に聞いたら……

「……一人とも苦労するな」

と苦笑いをしながら答えを返した。

まあそんな疲れた平日は終わつて今日は休みの土曜日。

今田は家でのんびり毎日と茶を啜つて朝方のことである。

「……平和だな」

朝からのんびりと茶を啜つている僕。

ちよつと年寄り臭いが、これってなんだか和むんだよね  
まあ、最近学校にいるあいだは人の目線を凄く感じるからおちつか  
ないと言つこともあるんだけどね。

「……優にい」

同じく茶を啜つてゐる皐月。

「なんだい？」

「最近学校で変わった噂がながれているの」

「へえ……どんな？」

それを聞いたら何故か皐月はいつもより無表情な感じになった。

……本来ならこの辺りから気付くべきだった。

いつもの大人しい皐月ではなく変に困つてゐる事に

「その噂によれば、ある男が学校の美女や美少女を手込めにしてる  
と……」

「ふうん……そうか」

それは恐い噂だな。

そう思いながら茶を啜る。

「じゃあ、皐月も気をつけろよ」

まあ皐月のことだから、万が一そうなつたら確実に相手を潰すだろ。  
なんせ格闘技じや、皐月は僕より強いからな～

そしてその話は終わりの筈だった。

その後の言葉が無ければ……

「……優にいが

「なにが？」

「優兄が手込めにしてるって噂」

「ブツ…………！」

思わず飲んでいたお茶を吐き出してしまった。  
そんな僕の反応に皐月は一瞬アクション。

「な、なんだそれはーー!?」

「いつ僕がどうしてそうなるーー!?  
はーー!? もしかして……なんだか最近やたらと人の視線が多くつ  
たのは尊が原因かーー!?  
そう悩んでいる僕に。」

「…………うそだよね？ 優にい」

皐月が僕を信じるような目で聞いてきた。

何だがさつきから表情が変だとは思っていたがこれのせいか…

「当り前だよ。嘘だよそれは」

やんわりと僕が答えた。

「…………そり… そりだよね」

信じてくれたのか、さつきようは普通になつた。  
と思つていたら

「…けど、皆に迷惑をかけるなら私で我慢して」

全く困った事に全然信じていなかつた。

それどころかさらに凄いことになつてゐる！

「ちよ、ちよいと待つた！－ なんでそつなるの！－？」

「えつ？ 私が嫌なの？」

何故泣きそうになる？

そして何故上目遣いで僕を見る？

「…優にい

いきなり僕の服を掴んできて

「……覚悟

そのまま押し倒されてしまつた。  
つてちよいと待てえい！－

「だ、大丈夫。私は…私は…」

何がどう大丈夫なのかがよく分からないが、かなり暴走している事だけは確かだ。

これが若さの勢いって奴か…－ つて

「ちよ、ちよつとまてええええええええええええええ…！」

人は暴走すると壊れると言う教訓を得た僕であつた。

そんな魂の叫びから数十分後

誤解を解くのに大変時間が掛かってしまった。

「解った？ 僕は別にそんなやましい事はしていないし、別に皐月が嫌いな訳でもない」

皐月に正座をさせてじつくりと説明した。

「…解つてくれた？」

そんな僕にこくりと頷いて納得した。

「わかつてくれたか」

この誤解を解くのにこんなに時間が掛かるとは……尊といつのは恐ろしい。

だがここで一つの疑問が残る。

「……どうしてこんな噂がながれているのだ？」

「そう、なんで僕の噂なんだ？」

それに…

「皐月は噂つて信じないはずだよね、どうして信じたの？」

そう。皐月は噂を殆ど信じない。なぜならその噂となつた人が『噂

通りとは限らない』とちゃんと理解しているからだ。なのに今回は信じた…何故？

「そり、それはその……」

ちょっと頬が赤くなつて。

「わの……………」まるかわー。」

「ああ！ 成る程」

納得した僕に皐月が

「え！？ わ、わかつたの！？」

何故だか動搖した。

なんなかい、せの鼻円とこどもと面ついた  
そう思いながら

まあね、畢竟は僕か……」

全力で僕の発言が妨害された。

「う、上に行つて休んでくるーー！」

それだけを言い残して全力で走つて行つた。

「……なんだつたんだ？」

田を丸くしながら

「皐月は僕が学校で噂になると迷惑がかかる。って言おうとしただけなのにな？」

「これは」れで謎のままだった。

そしてこの後、やがて緊急事態が起きた…

「わて、お皿は何つくらいかな～」

全然これっぽっちも思っていなかった。

それは平凡な一日が半分ほど過ぎた時だつた。

「つーん。もう今日はやる」とは殆どしたな

家事に洗濯に掃除。

これらを休みの日に全て行うのが月見優貴の日課だ。

「…だけど、ちょっと張り切りすぎたかな？」

周りを見渡すと見事に綺麗になつていていた。

埃どころか塵一つも落ちていない。

氣むずかしい姑さんだって文句を付けられないくらいだ。

「じゃあ、あとは自分の部屋でも掃除しようかな～」

なーんてのんきに鼻歌を歌いながら自分の部屋に行くと…

「…………」

僕の部屋で女人の人気が寝ていました。

「…何でだろ？ 最近色々あつたせいかな？女人の人気が寝ているのよつ  
に見えるよ」

ちよつと田頭をほぐしてもう一度見てみるが。

「…変わらないな」

悲しい事に現実は変わらなかつた。  
さうによく見てみると

「あれ？ もしかして龍之さん？」

そう。その女的人は龍之由美さんだ。

いつも髪は一纏めにしてあるのに、今日は髪をおろしている。

それにいつも活発な服装とは違い、白いワンピースを着ていた。  
…髪形と服装がいつもと違つていたため、一瞬、誰だか解らなかつた。

それにもしても…服装と髪形を変えるだけでこんなに印象が違つとは…  
つて！ そもそも、なんでこの人がここにいるんだ！？

そう思つたときだつた。

「…ん？ 風？」

急に風が入つてきた。

あれ？ 確か窓は掃除をした後、閉めたはずなのに…そう思つて窓の方を見たら

「……なんだこれは」

よく見てみたら、ガラスが円形の切り取られていた。  
間違いなくそれは犯行が行われた証拠だつた。

「…塀の次は窓ガラス、か」

窓の役目が見事に無くなつた。

つてか、来るたびにこの人は壊していくなんだか泣きたくなつてくれる。

が、それはさておき、一体この人は何しに来たんだ？  
とつの本人は寝ているため話にならなし

「とつあえず、起こしますか」

やうしなことこの人はずっと寝てやうだしな。

「起きあくだわー」

ゆれゆれと揺らす。

「う、うーん… もう少し寝かして…」

寝返りを打ちながら寝言を言いつ。

しかもいつもとは違つてなんだか子供っぽい感じがする。

「ダメですよ。早く起きあくださー」

更にゆれゆれと揺らす。

「うーん… 分かった」

渋々起きた…が、問題発生。

「おお、あつあつ？」

いきなり抱きついてきたのだ。

「わー？ な、なにー？」

いきなりの事態に僕は戸惑つた。  
さすがに抱きつかれると僕だつて…まあ色々とね？  
そんな僕を余所に更に抱きついてくる。

「ゆつきだ～ゆつきだよ～」

僕の名前を連呼する龍之さん。  
明らかに寝ぼけている…

「ゆつき～」

そしてその瞬間、僕が思つてもいなかつた事になつた。

「えへへへ～」

「口」笑いながら僕の眼鏡を取つた。

「あー、ちよつと」

僕が文句を言おうとした時、僕は言えなかつた。  
なぜなら…

「ー？」

なにか柔らかい物が僕の唇に触れていたからだ。

一瞬なにが起きたのか分からなかつた。

だがそれはずっと僕の唇に触れ続けていた。

それは龍之さんの唇だった…

この辺から話が大幅に変わっていきます。  
では、どうぞ。

## 第壱拾參話・キスと記憶の混沌

龍之さんにキスされている…

意識すればするほど顔が赤くなるのが自分でわかる。  
やばい…これは非常にやばい。

これが緊急事態とは言わずに何とこう?

それなどうしてこうなったのかは知らないが、これ以上は僕の理性  
が持たない。

そう思った時だった。

「…んっ?」

妙に変なにおいが鼻を刺激した。

「…お酒のにおい?」

なぜかお酒のにおいがする。

どこからしているのか気になつて周りを見てみると…

「う、うーん」

先程から寝ぼけている龍之さんから微妙にお酒のにおいがする。

……これつてもしかして寝ぼけているのではなく、酔つているのか?

「だ、大丈夫ですか?」

なるべく刺激を「えないよつ」、小さい声で問いかける。

「う…あ、あたまが痛い…」

：明らかに一日酔いの症状だ。

そして確定した。この人は酔っている。

ふと龍之さんが顔を上げれば…

「あ、あれ？ なんで優貴がここにいるのだ…？」

ビックリしたように周りを見渡す。

：やはりボケていたらしい。

「いや、だつてここは僕の家だから」

「……あれ？ 私は家に帰つて寝ていたはずだが？」

本人は不思議な表情をする。

まあそういうだらう。

実際に自分の家だと思つていたら他人の家にいるんだから、ビックリするだらうなあ。

：色々とツッコミどころがあるけどね。

「しかし、優貴よ。お前は以外と……」

頬を赤くしながらちょっと嬉しそうに何かを言つた。

「え？」

『何が？』と聞こつとした時だつた。

僕の後ろの方から凄い殺氣がした。

あわてて後ろの方を見てみると

「…………なにしているの？」

皐月が立っていた。

だがそれはいつもの皐月ではない。

目線は氷のように冷たいし、明らかに殺意がある。

しかもその目線の先は僕ではなくて…

「…………」の入つて、あの有名な龍之由美つて言つ人だよね…」

龍之さんに向けられていた。

皐月に前に一度家に来たことを忘れているのでは？  
と言いたかったが、あえて口には出さなかつた。

……今何か言つたらただじやすみそうにないし、何より怖い。いつ  
もほのんびりとしているのに、今日の皐月は一段と怖い…  
そんな冷たい目線を受けている龍之さんは

「…………」

微妙に顔が引きつっている。

やはり龍之さんでも、今の皐月は怖いらしい。

「…………これはどうこうとかな？ 優にい」

顔は笑顔だが目線は氷河期だ。

午前中の皐月とはもう地球と海王星までかけ離れた状態だ。  
しかも彼女の手を見れば…

「あ、あの…………なんで青龍刀を持っているのかな？」

そう、我が妹の手にはいつの間にか青龍刀があつた。

「……もしもの時のためだよ。優にい」

そのもしもって何ですか？

つて聞いたら、きっと真つ一につになりそうだな。

「…で？ 勿論説明してくれるよね？」

「わ、わかりました」

我が妹ながら逆らえないなーと思つ僕だった。

やつぱり僕つてヘタレかな？

## 第壹拾四話・ひとつにもならない状況

「……と、言つわけです」

あれから一時間。僕らがどうしてこうなつたのかを一から説明した。初めから説明すると以外と長い物ので、結構色々な事が起きたんだなーと思いながら皐月の反応を見た。

「……そういう事なのね」

怒つているのか、それとも驚いているのか…多分両方だと思うが、そういうつた微妙な表情をしながら悩んでいた。  
まあ、僕もそう思う。  
僕だって未だに信じられないからなあ…  
と思つていたら

「…だけど納得はいかない！ 優にい！ 早くその人と別れなさい！…」

龍之さんを指さしながら強い口調でそう言つてきた。  
勿論、そんな反応を黙つて聞いていない人物がいる。

「まで皐月殿！ 私は優貴と別れる気はない！」

当然反応する龍之さん。

「五月蠅い！ あんたなんか彼女だなんて認めない！ それに優にいの事を呼び捨てにするな！！！」

いつもの臯月にしては冷静さが無くなっている。  
心なしか、焦つているよつとも見える。

「ふん、いくら言つても優貴は私の物なのだ！ それに臯月殿には  
関係ないだろ！…」

また、僕は物じやないぞ。

「何があなたの物よ！？ ふざけるにもほどがあるわ！…」

「ふざけてなんかいない！ 優貴は私の物だ！…」

段々と過激になつていく一人。

なんというかこれが女の戦いつて奴なのか？

…恐いぞこれは

そう思いながら傍観していたら

ピンポーン

と家のドアのチャイムが鳴つた。

…こんな時に誰だ？

と思いながら一人を見た。

「だから何度も言え！？ 優貴は私が一番好きなんだ」

「寝言は寝て言え！？ 優貴は誰にも渡さない！…」

思いつきり聞こえていない。

やはり今の一人には無理か、ここは僕しかいない。

……それにいつまでも「こ」にいたり、前のよつに元を込まれそうだ  
しね。

早々と出て行って、玄関の方まで行った……らっ。

「やつは～」こんばんわ。用見君

そこにはなんと渋田さんがいた。

「あれ？ どうしてここに？」

「たまたま近くを通り過ぎたから来てみたの」

「……そつなんですか？」

住所は教えてないはずでなのこ？

「そこはまび、乙女の感よ」

…………。

「……本当にたまたまなんですか？」

とても座じんですけど。

「た・ま・た・ま・です……。」

大きな声で怒鳴られた。

「…わりました」

勿論、それに反論出来る僕ではない。  
なので大人しく聞き入れた。

「それにしても私を疑うなんて酷いですね~」

「… そうかな?」

「はいそうです。おかげで私の純粋な心は痛く傷つきましたよ」

… その割には棒読みですね。

それに、なんか嬉しそうですけど…  
そしていやな予感がした。

こういったときだけ当たる妙な勘。

「だからトートしてください」

「……はい?」

なんだか変な単語が聞こえた。

「デートですよ。してくれますよね?」

… デート?

何故にそんな風になる。

「じっくり下さい」

その言葉には強い意志みたいな感じがした。  
だからその言葉に反応する物達がいた。

「 テツ、ナガテテートだとー? 」

「 何でそつなるんですかーー? 」

先程から部屋で口論をしていた二人だった。

「 あら? あなた達には関係ありません」

冷たくあしらつた。

だからそんなことで引き下がる一人ではない。

「 貴様がなんで優貴とテートをするのだー? 」

「 セウよー。優にいは忙しいのー。あんた達の相手をしていくほど暇じゃない! 」

なんだかよくない空気になってきた。

……ですがにこれはずばくない?

こんな時には……

こんな時には……

「 ……とつ、とつあえず。みんな部屋に入らつか? 」

良い案が思いつかなかつた僕だった。

## 第壱拾五話・修羅場つて大変だ！ 主に僕が

考えるべきだつた。

この三人が揃つた時点でどうなるかといつゝ」といふ

「…………」

「…………」

「…………」

居間に入つてから三人とも恐いくらいの無表情。

互いに、相手を警戒しながら様子を図だけでつかがつてゐるだけで、誰もが喋らない。

無言の空間だけがこの居間を支配いている。

はつきり言つて恐いです。早くこの場から立ち去りたい！  
これが僕の本心です。

だがこの三人を置いて僕は逃げれるのだろうか？

それは無謀、あるいは蛮勇に等しい。

……ならこの状況をどうするべきか？

そう悩んでゐる時に最初に沖田さんが口を開いた。

「……やう言えれば自己紹介がまだでしたよね」

「……この三つの全員に聞こえるように言ひながら

「私は沖田歩美と言ひます」

そして… 鼻円の方を見ながら言ひ出した。

「あなたのお兄さんの円見優貴君とは、色々と大変お世話になつて  
います」

今、何だか色々って所を強調したような…

そう思いながら鼻円の方を見てみたら。

「…………」

額に青筋を立てながら、明らかに不自然な笑顔になった。

それと同時に変な事が起きた。

バキッ！！

突然、後ろの方で物音がしたのだった。  
そつちの方を見てみると、置いてあつたラジオ（今年買つたばかり  
の新しい物）が凹んでいた。  
だが、そんな事はお構いなしに話は進む。

「…………そつなんですか？ それははつきり言つて迷惑ですよ」

鼻円は先程よりはましな笑顔で（明らかに敵意をむき出しだが）言  
う。

「優にいは困つても断れない正確なんですから」

… 言葉とは裏腹に『迷惑だから手を出してんじゃねえよ…』って言  
つているよつた気がする。

「とくにあなた」

「皐月が龍之さんに向かって言つた。

「あなたは何様ですか？ はつきり言つて迷惑です」

威圧するように言つた皐月。

それに同調したのか、沖田さんが皐月の言葉に「うんうん」と頷いていた。

……」これは困った事になるんじゃ無いか？

そう思いながら龍之さんを見てみると、以外と落ち着いていた。

「……私は龍之由美だ」

落ち着いた口調で言つた。

「確かに私は迷惑をかけているかもしない。それについては詫びを入れよう」

意外な事に一番怒りそうな彼女が一番大人だった。

「まあ、優貴と私が迷惑をかけるのは恋人同士だからな。仕方がないだろ」

いきなりそんな事を嬉しそうに言つた。

……前言撤回。全然大人じゃありませんでした。

それにはが仕方がないんですか！

元々は龍之さんが原因でしょうが……

つて！ 今の状況で変な事をを言つたり……

「はあーー？」

「……ムカつく……」

一人の怒りの圧力が空間を支配した。

その圧力はあまりに強い。空間が湾曲するべういに強かつた。

そのおかげで

バキッ！！

メキッ！！

ドカッ！！

グシャッ！！

家の至る所から嫌な音がする。

……このままでは威圧で家が崩壊しかねない。

ここはどうにか…

どうにかしないと……

そんな時にふと思いついた事を言つた。

「みつ、みんなでゲームをしようーー！」

そんな僕の発言にみんなは

「優にいいがそつまつながら」

「私もする」

「無論、私もだ」

無事に納得した。

その時は良いアイデアを思いついたなーと思っていた。

…だが、あとで自分の言った事を後悔する羽田になるとは微塵にも思つていなかつた。

さつきまで晴れていた空は、いきなりの悪天候になっていた。

そしてここ、月見家ではそれと同じ…いや、それをも凌駕する程の異様なまでの天候だった。

「…悪いがこの勝負、勝たせてもう一つ…」

「あら、残念だけど、勝つのは私ですよ」

「……一人とも後悔する」

殺伐とした雰囲気な三人。

こうなつてしまつたのはつい先程、僕が調子に乗つて言つた一言がこの原因である。

（数分前）

「で、なんのゲームをします？」

さつきはあんな事を言つたが、実はその内容はあんまり考えていないかった。

「そうだな…ではカルタ大会と言つのはどうだ？」

何故にカルタなんですか？

「色々とあるんだ。主に作者の事情とか」

「今、変な事を言つた気がするけど気にしないでおけ。それより他の二人がどうするかが解らない。」

「二人ともそれでいい？」

「二人の様子をうかがいながら聞いてみた。」

「うん。いいよ」

「……同じく」

「どうやらそれで良いらしい。  
なら早速始めるとしよう。」

まずはカルタの絵柄のある方をバラバラにしてぱらまく。

次にカードの読み手を一人決める（因みにこれは僕）

まあやることと言つたらこれだけである。

「じゃあ、初めて良いかな？」

まあここまで来ればあとは始める以外に何もないはず……と思つていたのが間違いだった。

「あ。そうだ」

いきなり声を上げる沖田さん。

「どうかした?」

「罰ゲームですよ」

「……罰ゲーム?」

いきなり何を言い出すんですか。

「そうです。やはり罰ゲームがなこと面白くないです

自信満々と言つ沖田さん。

「確かに、一理あるな

いやめて。

何処がどうして一理あるんだ。龍之さん

「では罰ゲームは負けた人は『一生優しいに近づくな』ってのがどうですか

淡々と言つ皇月。

「…つまり何が言いたい?」

「一言で言えば『一人とも優しくて今後一切関わるな』ってのがどうですか

「……やはり皇月殿とは、これからじつへつと話さねがならないな

「……最大の敵はやつぱり身内だね」

二人とも立ち上がり戦闘態勢を取った。

「……返り討ちにする」

同じく墨丸も立ち上がりた。

……あれ？

これって初めに戻っちゃうんじゃない？  
いかん！

「ちょ、ちょと待った！」

慌てて三人を止める。

「喧嘩はダメです！ 今は罰ゲームの話でしょ？」

「だが……」

「なら、今は罰ゲームを考え

「思いついた！」

先程よりもでかい声で言つ沖田さん。  
……ところで何が？

「罰ゲームだよ！」

「…それは先程みたいに変な事には

「勿論なつません」

そして自信満々に

「誰もが納得する理由ですよ」

成る程。

それなら良一はす……と思つてゐたのもつかの間だつた。

「勝つた人は一日、月見さんとテートをする」

「ちょい待てえい！…」

何ふざけた事を言つてゐるんですか！？

「別にふざけなんていませんよ？」

「じゃあなんでそつなるんですか！？」

「それじゃ、僕だけ罰ゲームじゃないですか！？」

「言ひ出しつペガ文句を言わないでください」

「いやいや、言ひ出しつペは沖田さんですよ」

「まあ、そんな事はあつちに置いて」

無理矢理はなしを終わらせた。

つていうか、今自分で言つた事を無かつた事にしたよね？

「それに元をたどれば丹見さんが言い出しつぺですか？」

「たつ、たしかに…」

ゲームをじょりつて言い出したのは僕ですけど…

「まあ、何らかのリスクがあつた方が面白いじゃないですか

や、そのリスクは主に僕しか背負わないけどね。

「それに他の人も納得しているはずですよ」

自信満々に言つて沖田ちゃん

逆に僕はと言つと…

「そつ、それはどうかな？」

そんなどりでも良じよつな事で納得するはずがない。  
そう思つていたのだが

「そつ、それはいい！」

「私もそれで納得です！」

勢いよく承諾してくれました。

「ね、納得してくれましたよ」

嬉しそうに微笑む沖田さん。

「皆がそういうのならいいけど…本当にいいの？」

自分でも言つのもなんだが、あんまり得くにはならなことと思つけど…

『いいです！』

即答だった。

「……じゃあ、それでいいです」

斯くして、ここ月見家でカルタ大会が始まつたのだった。

第壱拾七話・賭け事には犠牲が付き物だ！ 後編

「じゃあ、始めるけど……準備はいい？」

一応確認をしておかないと、また何を言われるかわかったもんじゃないからね。

「いいぞ」

「いいよ

「……大丈夫」

もつこの時点で集中しているらしく、言葉数が少ない。つーか、この集中力をもつと他の事に使ってほしい。

「ではまず初めに……犬も歩け」

バシ  
ン！！！

我が家が揺れるほど轟音が響いた

「……え？」

一瞬なにが起きたか解らなかつた。  
僕が気付いた時には

「ふつ、悪いな二人とも」

不敵に微笑む龍之さん。

「くつ、あと少し早ければ」

「……悔しいです」

本当に悔しそうにしている。

勝負は一瞬で終わつたようだ。

…が、それよりも気がかりなのは我が家の中だ。

「畳にこんなにくつきりと三人の手形が… どんだけ凄いんだよ」

三人の手形がくつきりと畳についていた。

ホント…涙しか出でこないよ。

こりやあ、そろそろ畳も換えないといけないのかな。  
そう悩んでいたとき

「早く次をお願いします！」

沖田さんが先程の悔しさを晴らすように言った。

「え？ あ、はい」

そしてまた静かになる。

「じゃあ…猿も木か」

ドカアアアアアン！！

またざざましい音がした。

そもそも効果音があり得ない。

なんで地雷が爆発したような音なんですか…

「とりましたー！」

今度は沖田さんがとつたよつだ。

「くつ」

わつかはとつていた龍之さんが悔しかつにしたいた。

「…………」

鼎円に至つてはむつ恐いへりて黙。

「じゅ、じゅあ、次くよ」

次の札を取つて読み上げる。

「えつと…棚からぼた餅」

今度は最後まで読み終えた。

「…………」

「…………」

「…………」

……あれ？

今度は誰も反応しないぞ。

「優貴、ビニにもないぞ」

「確かにありませんね」

龍之介さんと沖田さんがカードを見ながら囁く。

「……ふつ

何故か皐月が笑つた。

「もしかして……」これを探しているの？」

そう言つて見せたのは、僕が読み上げた札だった。

「あまりにも遅かったから……つい、ね」

明らかに挑発するよ、ひ、ひ。

「……あなた達にはこのカードのよつと、影から消えてもらひます  
けどね」

意味深に言つ、皐月。

そして一人はと言つと…

『……』

無言になつた。

恐いくらいに無言。

異次元から何かが出てきたりうなくらいな雰囲気になっていた。

…そして

「……やつぱり、妹さんだけは倒すべき敵ですね」

「回感だ。私もそう思つ」

なにやら共感を得たらしく、沖田さんと龍之さん。

「ま、まあ、勝負はこれからだよ」

一応、なだめてみたがもう無駄だつた。  
三人ともいやなスイッチが入つたらしい。

～その結果～

「勝つた」

勝利したのは龍之さんだった。

「へへやしこ…」

メツチャクチャ悔しそうな顔をしている沖田さん。

「…………」

同じく悔しそうしている墨田。

そして僕はと叫ぶと

「…………泣ける」

見るも無惨になつた畠。

穴が開いたり、一部が凹んでいたり、何故だか知らないが青龍刀や日本刀が刺さつていたりと、凄まじいことこの上ない状況だ。

「…………今月は赤字かな？」

家計簿を見るのが少しだけ嫌になつた。

## 第壹拾八話・ひとつもない」と

あの騒がしい土曜日が過ぎてから数日

それは突然言い渡された。

「用見。明日学校を休め」

「……はい？」

今日のお勤めを（主に精神的に）果たし颯爽と我が家に帰ろうとしたところ、いきなり担任の有馬先生に不思議なことを言われた。

「……それって僕に明日学校に来るな。と言つ事ですか？」

「おひ。そうだ」

この担任は一体何を言つているんだ？  
はつ！ ま、まさか担任も嫌がらせをするきなのか…？

「お前は壮絶的な勘違いをしているな」

そう言つて、鞄から書類とバスの空港行きのチケットを出した。

「実は来週からうちのクラスに転校生が来る」

それが明日学校に来なくていい理由とどう関係があるのだ？

「その子は留学生でな、まだこの地域に不慣れなんだそうだ」

「へえー」

「そこでだな、ここは担任として校長に出迎えを命じられたのだ…  
不本意ながらな」

それは担任が言つ台詞か。

「ところがだ。明日から急な用事が出来てしまつてな、俺は出迎えに行けなくなつてしまつたのだ…ラッキーな事にな」

そう言つて僕の方を見る有馬先生。

心なしか嬉しそうにしているのは…僕の氣のせいではなかつた。

…なんだか嫌な予感がしてきた。

ここ最近妙に当たる嫌な感。

その感が警告していた。

このままでは危険だと…

「ここまで来ればわかるだろ?..」

「いえ、解りません」

そして回れ右

「帰らして頂きます」

そのまま帰らうとした。

「まあ待て」

見事にがつちりと捕まえられてしまつた。

「解らぬいのであれば教えてやる」

「いいです！ 謹んで遠慮します！」

そんな僕の抗議は無視され

「丹見…明日、そのままの出迎えを俺の代わりにしてくれ

やつぱまつぱうこうつか。

「それにしてお前なんで僕なんですか？」

そう言つた事は、賢治とか龍之さんとか普通は優秀な人に頼むでし  
。

「いや、俺はお前に頼む」

そこへ一端真面田になり。

「もし明日、このクラスで何かあつたら……お前責任とれるか？」

「…とれませんけど」

「だら、それにお前が行くと後々おもしる……」

「おもしる？」

「ゲフンゲフン！……いや何でもない、『気にするな』

なんか今一瞬本音がでたよつた気がするが…『気のせい』か？

「それにお前一人居なくなつても、別にどうつて事無いしな

今何気なく酷い事を言われた。

こいつ本当に教師ですか？

「理不~~死~~すぎます」

当然抗議するが

「まあ、気にするな

そう言つて資料とバスの空港行きのチケットを無理矢理僕に渡して  
行つてしまつた。

しかも逃げるのにその間5秒

「…………どうしてこういう厄介」とが僕にまわつてくるのかな？

そんな事を言つても誰かが答えてくれる訳でもないんだけど、そう  
咳かずにはいられなかつた。

「あつ、因みに」

厄災がまた帰つてきた。

「俺は明日から学校に来ないからな

「は？」

今なんと？

「その代わりに明日から新しい担任が来るはずだから……そしたら辺  
よろしく」

そういつて去つてしまつた。  
つちよつと待てえい！！

「僕にどういふとー？」

そうは言つがもうすでにいなため叫んでも仕方がなかつた。

## 第壱拾九話・迷惑千万（前書き）

第壱拾参話をちょいと訂正しました。  
それだけです。つてか、訂正するだけなのに遅くなつてごめんなさい。

バスの中でゆらゆらと揺れてやつて来た場所は、空港の到着ロビー平日なのに意外と混んでいたので、見渡しの良い後ろの方で待っていた。

「ここまで混んでると探しようがないな」

一人ポツンと突っ立つて いるのは月見優貴。

出迎えとそのホームステイ先へ案内。それが任された事だった。まあ、無理矢理任されたことだけど

「… それにしても人が多いな」

周りを見るかぎり人だらけ、こんだけいれば見つかる人もなかなか見つからない。

それ以前に相手がどんな人かも解らない。

「まつたく、どんな人かも解らないのに探せだなんて…」

と言ったところでふと思い出す。

そう言えば渡された書類があつたけ。

「あれに何か手がかりとかないかな」

そう思つて持つててきた鞄から昨日渡された書類を見てみると、中から詳細データとその留学生の写真らしき物が出てきた。内容はこういったものだった。

名前はクリス・シュナイゼル

フランスのクライアン高校からの留学生

性別は女性

身長は170cm（僕より少し高い）

体重は…書いてない（多分修正したんだろう）

年齢は僕と同じの十七歳

得意な分野は理数系

スポーツはそこそこ出来る（何故か剣道だけは師範級だった）

備考：小学校まではここに住んでいた。

これが先生（元担任）から渡されたデータである。

写真の方を見てみれば…多分、東欧系であろう。  
凛々しい顔立ちにショートカットの目立つ金髪  
瞳は淡い瑠璃色

間違いなく美人といえる人である。

但し、問題点が一つあつた。

別に容姿や性格に問題があるわけではない。  
むしろパーフェクトなぐらいだ。

ではその問題は何かというと……備考を更に読んでいった所に書いてあつた。

備考：月見優貴と結婚のため花嫁修業をする。

「……」

あれ？ おかしな…

眼鏡にひびが入っているのかな？

一度眼鏡を取つて

ハンカチで拭いて

また掛けなおして見た。

しかし変わらない物は変わらない。

むしろ眼鏡を拭いたため綺麗に見えてしまつた

「…………」

開いた口が塞がらないとはまさにこのこと。

「なつ、なんで僕の名前が…？」

そう何故だか知らないが、僕のことを相手は知つていてるのだ。  
それも何故だか知らないが結婚相手として

「…はめられた！？」

あの教師はこのことを知つていて頼んだに違いない！

これは今からでも帰ろうかと悩んでいたがすでに遅かつた  
何故なら…

「おまえが出迎えの人か？」

「へ？」

話しかけられた方を見てみると

「出迎えの人であつているな？」

そこにいたのは写真で見たまんまの彼女  
クリス・シュナイゼルその人であつた。

「その」の学校ではと黙つと

「…今日は優貴は休みか？」

私が龍之由実は彼の席、月見優貴の席を見ながらそつと呟いた

「おや～今日もまたあちらを見ちゃつて、本当やけるねー」

そう言つて話しかけて来たのは、一応私の親友の春野はるの渚なぎなだつた。

「ちよい待ち！一応つてなによー！」

「まあ気にするな

そんなことよりも優貴の方が気になる。  
いつもなら来ているはずの時間帯。

なのに今日はどうして遅いのだろうか？

そんなことを思つていたら

「すみません」

そう言つて教室のドアが開いた。

そこにいたのは月見優貴の妹、月見皐月だつた。

皋月殿は一度教室を見渡し…

「……泥棒猫」

の方を見ながらそつと云つた。

「誰が泥棒猫だ！？」

全く失礼な奴だ。

「……ひうで皋月ちゃんはどうしてここに来たの？」

春野が皋月に聞いてきた。

「……まさか私にそれを言いに来ただけだったたらさすがに怒るわ。だが、そつではなかつたらし

「……優にいに弁当届けに来た」

「は？ 優にい？」

春野は誰のことか解らないうらしい。

「……優にいはどい？」

「優貴はまだ来てはおらぬぞ」

「……え？」

私の言葉に皋月殿は驚いた反応を示した。

「……本当に？」

「失礼だな、優貴の事で嘘などつくわけがなかりつ」

「失礼だな、優貴の事で嘘などつくわけがなかりつ」

「失礼だな、優貴の事で嘘などつくわけがなかりつ」

「失礼だな、優貴の事で嘘などつくわけがなかりつ」

「どうしたんだ？」

「……おかしい」

「なにがだ？」

「……優にいは私より先に出た」

「はあ？」

「つまり？」

「……つまり優にいは既に学校にいるはず」

「しかしいないもはいないぞ。」

「……どうして？」

「それは私が知りたいぞ」

「彼女たちの間に謎だけが残つた。」



## 第35拾話・自体は悪化の方針で…

現在場所を移動して高速バスのバス停前、バスが来るまで時間があつたため、荷物を脇に置いてしばらく待つ事にした。さて、これからバスに乗つてクリス・シュナイゼルさんを連れてホームステイ先に行くのだが

「……」

「……」

会話がない。

会つてからすでに數十分、一言も喋らない。僕のほうをちらちらと気にかけているみたいだけど一向に喋る気配がない。

まあ余計な事を聞かれるよりははるかに良いが、ホームステイ先を僕は知らないので彼女を送り届けようがない。……さてどうしたものかなと色々悩んでいたときだった。意外な人物が僕のほうにやつて來た。

「あれ、こんな所でなにをしていいの?」

話しかけられたほうを見てみると、なんとそこに居たのは

「沖田さん?」

なんでこんなところに? しかも私服で…

「今度、公演があるからその打ち合わせの帰りだよ

嬉しそうに言いながら僕のほうに近づいて……

「…え？」

固まつた。

いや正確には驚いていると言つた方が正しいだろう。僕の隣の席を見た瞬間、微妙に顔が引きつった。

「……君は一体なにをしているのかな？」

何故だろ？ 先程と変わらない笑顔なのに妙に迫力があると言つた。何か変な感じがするのは気のせいだろ？

「学校をサボつてこんな場所で……もしかして逢引ですか？」

笑顔で毒舌だつた。

「違います！」

何でそつなるんですか！

「じゃあなに？ 彼女ですか？ 恋人ですか？」

「いやいや、なんでそつなるんですかー？」

「じゃあ彼女にしたいですか？」

「え？ 彼女に？」

微妙に困った質問をしてきた。

「こでもし……

『彼女にしたいですね』

と答えたなら間違いなく沖田さんが怒る。

なんで怒られるのか分からぬけど、雰囲気で分かる。

今の彼女は確実に怒るだろう。

しかしだ。

もし、もししだが、ここで

『彼女にしたいとは思いませんね』

と答えたたら…何となくだがシユナイゼルさんが怒るかもしれない。  
まあそんな事はないとは思うが、もしそうなつてしまつたら後々大  
変な事になる可能性もある。

… ここは当たり障りのないよつと答えるか

「僕として『やつぱり答えなくていい…』

「…………はい？」

僕が悩んで答えようとした矢先にとめられた。

「また月見君には早すぎる」

真剣な表情をしながら、わけの分からぬ事を語り出す沖田さん。

「あの……」

何がどうなっているの？

そう聞くとしたら

「なに？ それともこの子を彼女にしたいの……？」

「い、いえ、やうじやなく……」

「や、やつやうなの……やつなのか？ ふざけんなあ……？」

逆切れされた揚句に怒鳴られた。何故に？

「ちよ、ちよっと落ち着いてください……」

慌てて宥める僕。

しかし沖田さんは止まらない。

「これが落ち着いていらっしゃる？ 無理だよ……」

微妙に涙目になりながら僕のまつにまつに寄つてくる沖田さん。

……そんな時だった。

隣に座っていたショナナイゼルさんが口を開き……笑った。

「くふふふ……あはははは……」

そんな彼女を僕と沖田さんは驚いてみていた。  
だつてさ、さつきまでクールに黙っていた人が突然笑い出すんだよ。  
そりやあ驚くわあ。

「ははは…はあ」

そして笑い終えて一言。

「お前達は面白いな」

と笑顔で言つんだから怒りようがない。  
むしろ馬鹿らしくなつてきた。

「…」めん少し混乱してた

「うん。まあ気にしないでいいよ」

そつ言つて仲直りをし始めたとき…

急にまじめにショナナイゼルさんが僕らに聞いてきた。

「所でさつとき用見とか言つていなかつたか?」

「…………あ」

しまつた。

どうやら重要な所を聞いていたらしい。

「い、いやそれは…」

どうにかして誤魔化そうと思つたが

「あれ？ 月見君自己紹介してなかつたの？」

沖田さんが先に答えてしまつた。

（龍之由美からの視点）

優貴がいなぎにはきっと理由があると思い、皐月殿が教室に帰つた後、すぐさまこの出来事に詳しそうな人物の所に渚と一緒に行つた。

「為るほど、だから俺のところに来たつて訳か」

その人物とは優貴の親友の富田賢治。自分の席に座つて携帯を弄くつていた所を発見。

「それにしても……なんか久しぶりの出番だな」

いきなり訳の分からぬ事を呟いた。

「なんのことだ？」

「気にするな、ただの戯言だ」

ふつと微笑む富田。

周りの女子や渚が奴の微笑を見て赤くなつてゐる。まあ私は優貴一筋なのでどうつて事ない。

「で、優貴の事について知りたいんだろ？？」

「その通りだ」

「なら良いタイミングだつたな

何が？

「ほんじこれ見てみろ」

そう言つて富田は自分の携帯を私に渡した。

「これがどうした

私は優貴の事が知りたいんだ。

お前の携帯になんぞに興味はない。

そう思つて渚に携帯を渡して…

「私は優貴の場所を知りたいんだ」

そう言つたら富田は苦笑して

「まあ焦るな、俺の携帯の受信覧を見てみる」

そう言つてきた。

「受信覧？」

私が疑問に思つたとき渚が声を上げた。

「…何これ？」

渚が微妙な顔をしたので私も気になつて見てみたら

「……」れが言いたかったのか？』

「やつだ」

……確かにこのメールを見たらどう答えたら良いか分からなくな  
何故なら

『緊急事態発生です。至急応援を…今すぐ助けに来て！ 僕だけ  
やあ無理です…』

……一体どうしてこうのだ？

私は見た瞬間そう思った。  
そして渚は

「用見君つて一体…」

微妙にコメントにも困つてこむよつだ。確かに『れはコメントが難  
しいな。

つていうか一体優貴はなにをしているのだ？

そんな私達の疑問に富田は答えてくれた。

「きつとまた不幸な田にあつてるんだろ」

平然に書つ富田。

「…………」

何となく理由はわかる。

が、その不幸な出来事の矢先が私なのだから言い返せない。

「まあこいつもの事ながらよく色々な田に遭つた

遠い田をしながら懐かしそうに言つた。

「… そうだな

いやもう本当になんて言つてよこや。ひ

もしかして昔からこうだったの?」

渚が興味深かそうに聞いてきた。

「やつだ。あいつは何て言つたか『不幸に好かれてる』って感じだな

そいつはまた嬉しくないな。

「まあ、あいつひと口では日常茶飯事つて感じだな

そして最後に独り言のように呟いた。

「……なのに誰にも頼るつとはしない。いつも一人、あの時も…」

一瞬暗い表情になったのが、何事もなかつたかのように先程と変わらない表情で聞いてきた。

「で、どうするんだ?」

「何をだ?」

「助けに行くのか? それとも行かないのか?」

そんな質問の答えは決まっているだろ。

「私は優貴のためには何だつてするや」

私がそう言つたらなぜか渚が驚いたよつて言つてきた。

「へえー　由美からそんな言葉が聞けるなんて…本当にびびつたの？」

「なに簡単な事だ」

私は笑顔で言つた。

「好きな相手のためなら何だつてしてやれるからな」

そんな私の言葉に渚…………ではなく何故か教室の男子が叫んだ。

『くそおおおおおおおおおおおおおおおお…円原のやつらがひたすら…』

『羨ましい…ついやましこどおおおおおお…』

『ただでさえ我が学園のアイドルを一人とも独り占めして…のうとに…!!』

『めがねのふんさ』でええええええええええええええ…!!

『くわおおおおおおおおおおおお…』

『ゆるせねええええええええええ…!!』

教室にいた男子の殆どが泣きながら出て行ってしまった。

何なんた  
一  
体  
？

私が不思議そうに言つたら

「さあね」

まあ氣持ちは分からんでもないかな」

苦笑している瀧と畠田であった。

～月見皇月の視点～

私はあの教室を出た後、すぐさま行方不明？の優にいを探すべくとある場所に向かった。

学校から歩いて約十五分。そのとある場所とは優にいのバイト先の喫茶店だった。

但しだだの喫茶店ではない。ここは店長自ら、食材を探つてきている。

私から言えば、ちょっと変わった方法で運営をしている店。

「……おはよ／＼いります」

朝の静かな時間帯。

まだ店が開いていけど、いつものことだから勝手にはいる。

「おや？ 皇月ちゃんかい？」

中に入つたら、カウンターに立つていてるじつこおじさんが私に挨拶をしてきた。

このじつこおじさんの名前は、近藤 鋼。名前もじつこ。この店のマスターである。

「こんな時間から珍しいね」

ダンディーな笑顔であるが、妙に迫力がある。例えるなら、歴戦の傭兵つて感じ。

「で、一体何の用だい？」

「優にいの居場所」

そう言つたら、マスターは少し驚いた。

「おや？ 優貴君は家出もしたのか？」

私は首を横に振る。

「朝から用があつた。けど優にいがいなかつた」

そう答えた。

「……為るほど」

マスターは納得して

「もしそうだつたら、皐月ちゃんがそんなに落ち着いているはずもないしな」

……確かに否定はしない。

「残念だが、わしの所には来ていないな」

「……そう

じゃあ、何処に行つたのだろう？  
私は少し考えて

「……昨日、優にいが何か言つてなかつた?」

そう聞いたら。

「うへん。……そつ言えば昨日『人を空港まで迎えに行く』つて言つてたな」

為るほど、と言つ事は優にいは空港にいるのか。

……あれ?

「……マスター。その『人』つて誰?」

「さあ? わしもそこまでは聞いていないからね

「……そ、う」

まさかあの人気が帰つてきた?

……いや、その場合私の所にも連絡が来るはず  
じゃあ一体……誰?

「……ま、いいか」

ある程度の情報は集まつたし。  
実際にに行けば分かる事だし。

「……ありがとう、マスター」

「お礼を言われる程の事はしどうんよ」

先程と変わらず、笑顔で答えるマスター。

「じゃあ……またね」

私はマスターに別れ告げて外に出た。  
早速、優にいがいると思われる空港に：

「……あ」

空港の場所がわかんない。

「……まあ、どうとかなるか」

そんな風に私が考えていたとき、携帯に電話が来た。

「誰？」

まさか優にいから？

そう思つて急いで出てみたら。

『ちょっと鼎用！ 一体なにしてるのーー?』

誰かが大きい声で怒鳴つてる。

……誰？

『…今、あんた「誰だ？」って思つただろ?』

なかなか鋭い。

『あんたは友達の名前も忘れるのか?』

友達？

……………あ。

「もしかして……香枝？」

『もしかして？ ジゃなくて、その高坂こうさか 香枝かえだよー。』

なんだ優にいじやなかつた。

まあ、声が違つたしね。

「それで……何か用？」

『何か用？ ジゃないでしょうがーーー。』

怒られた。

『今日は美術部のインタビューで、あんたが呼ばれてたでしょ？』

美術部…………私が入つている部活だ。

そう言えば、先輩がそんな事を言つてたような…………で？

「それがどうしたの？」

私がそう聞いた瞬間。

【プチッ】

何かが切れた音がした。

『あ・ん・た・が居ないと話にならないでしょうが……』

怒られて、怒鳴られた。

『早く戻つてこんかい……』

ついでに口調も変わつたみつだ。

「……でも」

反論しようとしたが。

『でもじやない……』

きつぱりと言われた。

『早く戻つてこなかつたら……』

「……戻つてこなかつたら？」

そこ少し間を空けてから。

『優貴先輩に言いつけとくからね』

「優貴先輩？」

その瞬間、私の頭の中で図式が浮かび上がつた。

優貴先輩=優にい 言いつけられる 優にいに怒られる。

……怒られるのは嫌だ。

優にいが怒つたら……恐い。

あれは恐い……

滅多に優にいは怒らない……けど、前に一度怒られた事がつた。その日は恐怖で眠れなかつた。あんなに怒つた優にいは初めてだつたし……なにより……

「…………う、ううう……」

恐怖で体が竦む。

思い出すのはよかつ。

「わ、わかつた！　すぐ戻るー。」

『よろしい。なら早く戻つてきなさいよ』

そういう残して、香枝は電話を切つた。

「……はあ」

優にいを探すのは後、か。

そう思いながら、早く学校に向かう事にした。

香枝がまた怒つて電話をする前に。

第弐拾參話・知らない事情は難とせり

わたりて、この話は数時間前に遡る。

もととわかりやすく言えば、第弐拾話に戻る。

\* \* \*

「やはりお前が月見だつたのか」

シユナイゼルさんは僕の方をまじまじ見ながら

「あの…『やはつ』ってどうこの事ですか？」

「…顔は悪くは無い、どつちかと言つと結構良い方だし。それに何か武術をしているのか筋肉がそこそこついている」

僕をじろじろと見ながら、一人ぶつぶつ言い出す。つてか僕の話を聞こつよ。

「一体全体どうこつ事？」

沖田さんも戸惑いながらシユナイゼルさんに聞くが

「合格だな」

その言葉を軽く無視していた。

といひで『合格』つてなにが？

そつ思つた時、予想もしていなかつた言葉を口にした。

「月見優貴。約束通り、私の『婿』になれ」

「…………え？」

「はい！？」

氣まずい沈黙が場を支配した。

その結果。

「…………」

「…………」

「…………」

「こうなつてしまつた訳です。

なんとも空氣が重たい。

人つてその場の雰囲氣であらゆる空間を作り出すんだな。

確か前にもこんな状況があつたよくな……

「…………ねえ、月見君？」

笑顔で僕に聞いてくる沖田さん。

いい笑顔……なハズなのにかなりその笑顔が怖いです。

「あの人気が言つてた『約束』について……『じつこじ』とか、私に解るよつにキッチリと説明して」

「いや僕にも何がなんだか……」

僕も『約束』については本当に分からぬ。

「いいから、ほり……わざと説明しろ」

最後だけ命令口調になつてゐるのは……『氣のせこじやありませんね』つてかなんで僕の事でこんなに怒つてるのだろうか？  
謎は深まるばかりだが、ここはあれだ。

少しでも落ち着いてもらわねば身の危険が……

とこつ事で

「いや、ほり、僕にそつと言われてても……ね～」

少しでも明るく言つて、場を和ませよつとした。

「ねえ月見君。『膾』と『開き』……どちらが良いくこと思ひ？」

額に怒りのバッテングマークをつけて、引きついた笑顔で言つた。

「…………」

やばい！明らかに地雷を踏んでしまつた！  
気分的には地雷というより核弾頭に近いけど、踏んで生き残れない  
とこつ時点で似たようなものだ。

つてか、これはちゃんと説明をしないと生きて帰れそうにな。それに一步間違えたら天国に行き……

「やうなる前に早く話してね」

そうしたいのは山々なんだけどねえ……

……あれ?

「なんで僕が思つていい事が解るの!…?」

僕が口に出して喋つていないので、読心術か?

「円見君。芸能界を生き残るにはね、読心術は基本なのよ

「…………へえー」

……いやな基本だ。

つーか、芸能界つてどんだけ危険な場所なんだよ。

「だから円見君も覚えててね」

「お断りします」

「まあ今はいいですよ。後で嫌でも覚えさせますから」

僕は断つたはずだよね?

なんでそうなるの?

「それに嫌だつたら、やうと教えてください」

またそつちに話が戻つてしまつたか。

仕方が無い。一応知つてゐる事だけでも教えよつ。

そう思つて、僕が説明しようとした時。

「私から説明しよう」

先にシユナイゼルさんが言つた。

「…………」

沖田さんは黙つたまま睨んだ。

どうやら、あまり良い感じではないらしい。

つてか、助け船をだすのだつたらもう少し早めに助けてほしかつたんですけど……

と僕が言つたら、

「なーに、月見が困つてゐる所を見てたら、そつちの方が面白つくてな……」

クッククック……と笑いながら言つた。

「なんというか、あれだ。

あつと氣にしたら負けなんだろつ。

「…………もつこいですか、早く言つてください」

「ならばまづじよつ

そう言いながらも未だに笑つてゐる。

そしてしばらく笑つた後、彼女は語り始めた。

「そもそも、これはお前の父親の遺言でもある」

「丹見君のお父さんの…？」

沖田さんはかなり驚いた。

だが僕は……それ以上に驚いた。  
だってそれは僕の予想外だった。

「僕の父さんが？」

それは一体どういう事だ？

どう考えても嫌な感じしかしなかった。

第弐拾參話・知りない事情は難とせり（後書き）

次回、例のあの人登場！

## 第武拾四話・我が道進む、それが父！

「あの……僕の父親の遺言ひでごんこの事ですか？」

激しく嫌な予感がするが、ijiは聞いておかねばならない。

「あ、私もそれ知りたい」

沖田さんも気になるらしく。

「つむ、なら教えてやるわ」

それを聞くと、なぜか嬉しそうに言つた。

(ijiからはナレーションとして作者・伊藤勇作がお送りします。)

むかし、むかし。

といつても、そんなに昔ではありません。

今から約8年前の事です。

あるといふに普通……とはけよつと言い難い家族があつたそつな。

その夫の名前は、月見団御

妻の名前は、月見秋

息子の名前は、毎度お馴染みのへタレな主人公。月見優貴と  
(優貴・へタレ言つな！)

平静沈着だけど、兄の事になると周りが見えない妹。月見臥月  
(臥月……否定はしない。)

その頃はまだ幼くて可愛げがあり、優貴は今よりヘタレではなく、臥月はこの頃から既に兄ラブでした。

(優貴：こらこら)

そんな家族の夫。月見団御は仕事で、中国に旅行に行つたそつた。

そしてそれと同じ日に、仕事で旅行に来ていた男がいたそつた。

その男の名前はダイン・シュナイゼル。

クリス・シュナイゼルさんの父親もある。

月見団御とシュナイゼルが、どうやつてであったのか?  
どうして優貴とクリスさん許婚になつてゐるのか?  
ここからが、物語の始まり始まり

登場人物。

\* 月見団御。

\* ナレー・ション・伊藤勇作。

後は秘密。

\* \* \*

「中国と書つのは意外と広いものだな」

一人の日本人男性が地図を見ながらつぶやく。  
彼の名は月見団御。職業はカメラマンだ。

そんな彼が今、重大な決断をしている時だった。

「はて？ 野生のパンダは何処にいるんだ？」

野生のパンダの写真を撮るため、森に入つて数時間。道が分からぬ。

「まさか中国に秘境があるとは……恐れ入つたな」

かつこよく言つてゐるが、全然かつこよくない。何故なら、意訳すれば『ヤベーよ。遭難中しちやつた。てへ』と言つてゐるからだ。

「ま、ビリにかなるだろつ

月見団御は暢氣にそいつた。

どうやら、この性格は優貴に受け継がれなかつたみたいだ。  
(優貴・つるさいよ)

そして何処かの森で遭難して……いつの間にか1週間が経過した。

「くつ、流石の私も腹が減つて死にそうだ」

見た目で餓死寸前と分かるくらいに痩せていた。

「どうして森の中なのに……動物が一匹も姿を現さないんだ！？」

どうしてといわれても、現れないものは仕方がない。

「もつ植物だけじゃ嫌だ――――」

渾身の一撃ならぬ、渾身の『食べ物』への叫び。  
あまりにその声がテカかつたんだろうな。

何処からか、この声に反応して獣の叫び声が聞こえた。

「むっ！？」あちらから肉の声が！？」

（注意：肉の声ではありません。獣の声です。）

「待つていろー！ 肉ー！」

(いやだから、肉じゃなくて……まあいいか。)

そんなこんなで声のした方向に進んでいくと

なんと一般人が肉に襲われて いるではないか！！

(注意: 肉ではありません。) トマトです。

ええい、じゅうじゅう、とつるや、ナレー、シヨンだな。  
肉でもトロでも変わらんだわうが――！

(ニサニサ、サニサニ)  
（）

細かい事は気一シナ一イ。

(あ、じりめて、その台詞はちょっとまずいわ。)

「早速退治だ……」

などと言しながら、涎が滝のようにでている……トマトをビリビリ風に見ているのが、分かりやすいですね。

「トマトだらうが……ライオンだらうが……ゴジラだらうが……所詮は肉……！」

なんか腹が減りすぎて団御さんにおかしくなっています。あとゴジラは無理があると思いますよ。

「グルルル……」

どうやらトマトも襲おうとしている一般人よりも、団御さんの異様な闘争心（尋常な食欲）の方が危険と判断したみたいだ。

「ふつふつふつ……、と～ら～ 一週間ぶりのに～く～

なんかもう田が逝っちゃってますね。  
たゞがにトマトもびっくりして引っちゃってますよ。

「ああ、大人しく飯になれえええええ……！」

そういうながら飛び掛つていきました。

まあどつちかと言つと『飛び掛けた』と言つよりは『襲い掛けた』といった方が適切かもしません。

流石にトラも負けません。

なんせ肉食動物ですか!」ね

因みに、他の工場も言ひを詰めると

『俺を食料に！？

だそりです。

ハサウエイは戦って勝つ瀕々ですね

「……からせ、あえて音声のみでお伝えします。」

六  
六  
六

「おらーーー先手必勝ーーー！」

「ぐぬぬぬぬーーー（へそ卑怯な攻撃をーーー）」

「まだまだ！！」

「効かねーよー！」

「がおおおおーーーー(なら打ち碎くのみーーーー)」

「ぐーじーじーじー。 (かかつたな)」

「なにー?」

「ガオオオオーー (奥義。スラッシュファングーー)」

「いじらちも負けるかーー奥義。爆碎拳ーー」

どいじやら相打ちだったようだ。

「グルルル…… (お前なかなかやるな……)」

「ふつ、腹が減つていなければ、まだこんな物じやないぞ」

「グルル、ガアアアアーー (なら、さつさと決着をつけてくれるわーー)」

「上等だーーかかるこいやーー」

（以下省略）

凄まじい戦いですね。

音声だけでも迫力が……伝わりませんね。  
まあ、細かい事は気にしないでください。  
つてか、ナチュラルにトラと会話している団御さんも、こいつ人間  
なのかな?つて感じですね。

まあ、そんなこんなで数十分に及ぶ死闘の末。

「グ、ググル……」

傷ついたトラが逃げていきました。

どうやらリーフが負けを認めたようですね。

「へっ……あ、まで……」

どうやら団御さんもダメージがでかかったのか、一歩も動こうとしません。

まあ、あれだけ凄い戦いでしたもんね。

「う・う・う、待て肉……」

どうやらダメージのせいでの動きのではなく。  
ただ単に腹が減つて動けなかつたみたいです。  
これじや、ただの阿呆ですね。

「あ、当たり前だ。たかがトラ如きに私が遅れを……」

律儀に説明していたら。

ギュルルルルル

凄まじい腹の音が鳴つた。

「くそつ、流石に腹が減つた状態でトラを食料にするのは少し手強すぎたか……」

当たり前と言つ以前に、普通はトラを食料にしません。

「う、うるせー……ぞ

その瞬間倒れてしまった。

どうやら力尽きたみたいですね。

そんな倒れた団扇さんに

「あの、」れをだつた。

先ほど襲われかけていた男性が何かを差し出してきた。

？」

だ。ひ、かの譜田ひ、さひ、ひ

しかしその缶詰は田舎が望んでいた物でもあつた。

缶詰は肉であつた。

「あー・あっがとー・！」

団御は救われた。

そしてその男も救われた。

「いえ、こちらの方がお礼を言つべきです！！」

「いやいや、気にしないでください」

確かに気にする必要はないと思いますよ。

団御さんは明らかに『助ける』よりも『食料』を一番に優先していましたし。

「あの、是非お名前を教えてくれませんか？」

その男性が訪ねてきた。

「つむ、俺の名は月見団御だ。お前さんはなんと言つんだ？」

「あ、私は、dain・shynayzelです」

こうして彼らは出会つたのだった。

そして団御は恩人（缶詰）のおかげで助かり、森を抜けて、一人で酒場になだれ込んで飲み明かした。

そうして出来たのが許婚の約束であった。

『この私、月見団御とdain・shynayzelは

この酒場誓いにより

月見団御の息子。月見優貴と

dain・shynayzelの娘。クリス・shynayzelを

結婚させる事を誓います。

月見団御&dain・shynayzel 』

（ここでおしまい）

「…………」

沖田さんは睡然とした。

だけど頑張つて一言だけ言つた。

「月見君のお父さんて一体…何者?」

「はあ……」

僕はため息をついた。

まあ、何となく予想はしてたしね。

まったく。あの人はホント口クな事をしないよな、約束だけ置いて先に消えちまつたあの人恨めしいよ。

『ま、そういうな。これもお前が人として生きるための事だ。どうするかはまで自分で考えろよ』

「…………え?」

一瞬、誰かが何かを言つたような…

「月見君…―― どうするの――?」

「で? おぬしはこれからどうするのだ?」

一人とも僕に聞いてくる。

それ以外は聞こえない。

「……氣のせいだつたのか？」

まず、この状況をどうにかしないとな。  
その事を考えたら、さらに疲れが増したような氣がした。

第武拾四話・我が道進む、それが父！（後書き）

本来なら一番主人公に近い男、それが月見団御。  
また出てくる可能性あり。  
つてか、明らかにこいつ主人公だろ……つて感じ。

## 第貳拾五話・増えていく厄介事

阿呆な父。団御（自称：我の道に敵無し）のせいで、色々とやらししくなつてしまつた優貴。

さあ、これからどうする？　どうなる？

頑張れ優貴！

それいけ優貴！

\*\*\*

「ま、まあ、この件は後にして、まずはショナナイゼルさんのホームステイ先に行こうよ」

とりあえず話をちよろまかし、逃げだ優貴であつた。  
ヘタレすぎて泣けてきますね。

「……まあ、そうね」

かなり不満そうな沖田さん。

「私はそれでいい。とりあえず休みたい」

ショナナイゼルさんも同意した。

「で？　ステイ先の住所は？」

「……だ」

そう言つて渡された一枚の紙。

「うーん?」

見覚えがある住所だ。僕の家の近くかな?

「とりあえず、バスに乗ろうつか」

そして三人はバス乗つてステイ先に行く……。

のはいいのだが、ここでも事件に合いつとは思つてもいなかつた。

\* 現在バスの中\*

中は結構空いていて、前の方に一~三人ほどいるだけ。  
僕らは後ろの方に荷物を置き、席に座つた。

何だかんだで色々とあつたけど、どうにか落ち着いたな。  
少しだけ、ホツとする。

けど問題は山済みだな。

まず一つめはあの馬鹿（団御）のせいでこうなつた事だ。生前から  
迷惑はかけてたけど、死んでもなお迷惑をかけ続けるとは……恐る  
べし超絶大馬鹿者（団御のこと）

そして2つ目は、なんと言つても龍之さんや皐月に知られてはならない。

沖田さんに知れただけでこの有様だ。もし、もしだが……あの二人  
(自称彼女と兄ラブ妹)に知れたなら……

問答無用、殺されるかも？

「違うんです！ 僕じゃないんです！ あいつ（団御）が全ての元凶なんです！！」

「月見君……？」

「……あ」

思いつきり声に出していた。

周りの人。といつても少しだけだが、その人達の視線が痛い。

「大丈夫？ その……脳とか？」

「……大丈夫じゃないかも」

主に精神が。

「そりか？ なら私が 」

すかさずシユナイゼルさんが言つが。

「あなたがすると、余計にややこしくなります」

ちょっと棘のある言い方で止める沖田さん。

「なので、私に任せれば大丈夫よ」

ちやつかりと自分でやろうとしている沖田さんだが。

「大丈夫？ 大丈夫なわけないだる、馬鹿かお前は？」

物凄くストレートで『シユナイゼルさん。』  
せめて、もう少しソフトな言い方をしてください。

（そしてこの結果）

「…………」

「…………」

さっきまでの平凡な空気が、ちょっとやばげな雰囲気になりました  
と。せ。

なんでだろ、僕の関係ないとここで話しが勝手にややこしくなつて  
いく。

「…………」

「…………」

沖田さんとシユナイゼルさん。両者のにらみ合いが続きます。  
喧嘩するのかまいません。けど僕を巻き込まない範囲でしてほし  
いです。

「お前は私に喧嘩を売つてるとか？」

「そりゃいや、それに私は『お前』じゃなくて、沖田歩美と『お前は  
お前があります』

「私もクリス・シュナイゼルと言つ名前がある」

「なら今後ともよろしく」

「ひづらもな」

一人の視線でバチバチ火花が飛び散つてます。  
このままではこの火花のせいで、僕にとばっちりがくる。  
今までの経験がそうであつたように……（断言）

「ここは、援軍を要請するか」

こんな時に一番頼りになりそうな人物。  
といつても、僕の友達の数なんて極端に少ないから、どの道、賢治  
しかいないんだけどね……  
自分で言つててなんか悲しくなつて來た。

「まあ、氣を取り直してメールを打つか」

ピ・ポ・パ・ポ・ピ・・・・・・つと。  
打つた結果。

『緊急事態発生です。至急応援を……今すぐ助けに来て！　僕だけ  
じゃあ無理です！』

うーん、なんか微妙に大げさになつたかも知れない。  
あながち間違いではないけど……これはどうかな？

「……まあ、細かい事は気にしない、気にしない」

送信ツヒ。

「…………あの」

「ん?」

何だか呼ばれたようなきが……

「あの、すいません」

携帯から田を離し、呼ばれたほうをみてみれば……  
いつの間に知らない女性が立っていた。  
多分僕らと同年代。

先ほど前の席にいた人の一人だと思つ。  
そんな人が何でここに??

「あの、月見優貴君…………ですよね?」

「まあ、そうですけど…………」

なんで僕の名前を??

「み」

「み?」

「富田賢治君に、会わしてくださこ……」

「…………は?」

さらなる厄介ごとが増えたのは言つまでもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7548c/>

---

僕の彼女は極道さん。

2010年10月9日23時18分発行